
ツキを見て泣いたヒト

.neko

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ツキを見て泣いたヒト

【Nコード】

N0583Z

【作者名】

.neko

【あらすじ】

女神と魔王の伝説が伝わる大地ビルナード。そこを舞台として、魔王と鏡をめぐる一つの物語が幕を開く。

光

光。

それは美しい光であった。

まるで全てを忘れさせてくれるかのようにであった。

少なくとも、その人影はそう願っていた。

暗い闇夜に一人立ち、天から降り注ぐその光をいつまでも眺めていた。

優しく包むその光は、その人影にとって唯一の味方にすら感じられた。

でも、それは逆だった。

どれだけ願っても、その人影が満たされることはなかった。その見つめる先にある輝きに、ただ縛られるだけであった。

あの輝きだけが、今もこの目の前から離れられない。

1 彼は魔王を追う

少年は一人、空を見上げていた。

時刻は夜。少年の視線の先にあるのは月であった。大きな満月。その光はただ静かに少年の立つ草原を照らしている。それを少年はただじつと見つめていた。

(リユート・フェイタス)

それが少年の名前である。

年齢は十八歳。服装は見るからに田舎出身というものであり、都会らしい華々しさは微塵もない。だが、その背中にある長剣のことを考えれば、かえってその方が自然に映る。そのリユートに声を掛ける人影があった。

「いい月夜だな」

声に気づいたリユートは、その方向を向く。

そこに映るのは、リユートよりやや年上の青年だった。額のバンダナが特徴的だ。また、リユートと同じく背中に長剣を携えている。その青年を見て、リユートは眉をひそめる。

「……そうですね」

「ははは、警戒しなくてもいい。賊だったら、襲う前に話し掛けたりしないさ。俺はミトン。少し聞きたいことがあってな」

リユートはまだ警戒を解かない。

「僕に聞きたいこと？」

「名前、リユートって言うんだろ？」

その言葉に、リユートは思わず一歩退く。

「……どこかで会ったことがありますか？」

「いや、初対面だ。パドに立ち寄ったときに、自警所で依頼を受けただろ？　そこで名前を聞いたんだ」

そこまで聞いて、ようやくリユートは納得する。それにしても、依頼を受けた人間の情報をこうも簡単に漏らすとは。とはいえ、今回の場合、“依頼”が“依頼”だ。仕方ないのかもしれない。

こうなると、このミトンという青年の目的も何となく想像できる。

「それで、僕に何の用です？」

「その依頼を手伝ってやろうと思ってな。一人では何かと大変な依頼だ」

やはり、とリユートは思う。

その一方で、リユートに断る理由はない。依頼報酬が目的なわけではなく、わざわざ一人で苦難の道を選ぶこともない。その上、リユートが求めている”もの”を得るには、こういう輩との関係も必要だろう。

リユートは、ミトンを見る。自信に満ちた笑みとはこのことを言うのだろう。この種の人間に断るということを考えるだけ無駄だ。そう感じたリユートは決心する。

「助かります」

「話分かるな。俺の方こそよろしくな」

そして、二人は暗闇の中へと消えていった。

『この依頼をお願いします』

そう言っつて少年は一枚のちらしを渡す。その先には、カウンターを挟んで中年の男が立っている。その男は、そのちらしを見るや血相を変える。

『ガイタ村のっ……』

少年は頷き、そして真剣な瞳で男の目を見る。だが、男は首を横に振る。半ば呆れ顔だ。

『悪いことは言わない。あんた、まだ若いんだ。命を大切にしろな。これはギルドに依頼する予定なんだ』

『でも、揭示されていました』

『っ……ん』

男は返答に困り、困ったようにちらしを見る。

最近になり村に魔物が現れ始めました。

勇敢なお方、どうか魔物を退治してください。

報酬は村中から集めた一千万リンを用意してあります。

よろしくお願いいたします。

村一同

ガイタ

「……はあ。一獲千金って言ってもなあ。命あってなんだぞ？」

「……」

「ああ、分かったよ。でも、責任は持たないからな。名前は？ 紹介状を書くから」

「リユート・フェイタス」

ちょうど三年くらい前からだろうか。この地方に”魔物”と呼ばれる存在が突如として現れた。

最初の頃はそれほど多くもなく、大した脅威ではなかった。しかし、その被害は次第に大きくなっていった。最近では、魔物を恐れ、この地方を去る者も現れ始めている。

それと同時に魔物退治に乗り出す者達も現れた。その筆頭は、この地方の首都バリプレートが誇る聖騎士団だ。それに続くのが、魔物退治の依頼を請け負う幾つかのギルド。また、少数ではあるが、リユートやミトンのように個人で動く者も存在する。

もっとも、個人で活動する者の多くは、特別な事情を抱えているものだが。

時刻にして二十時過ぎであろう。いつの間にか入り込んでいた森は静まり返っている。微かな月明かりはあるものの、やはりその光景は不気味さの方が強い。こうなると、急な同行人でもありがたく

感じる。少し前を歩いていたその同行人が、不意に振り返る。

「あそこに小屋がある。そろそろ休まないか？ まだ距離もあるんだ。無理して一晩中歩くこともないだろう」

そう言い終わると、ミトンは小屋の方へ足を進める。もとより返答を待つつもりなどなかったのだろう。リュートもそれに続く。

木造の小屋はしっかりしたものであり、毛布なども用意されている。おそらくは、ガイタ村の人間が、町に出るときに使用している小屋なのだろう。

「悪くはないが、ここ最近は使われていないようだな。仕方ないか」

「そうですね」

そう返事しながらリュートは荷物を置く。そして、ボトルに入った水を飲む。その様子を見ていたミトンが口を開く。

「随分と落ち着いているな」

「そう見えますか？ 緊張はしていますよ。でも、後悔するくらいなら依頼なんて受けない。それにお互い様ですよな？」

「俺か？ なるほど、それもそうだな。とはいえ、俺は強いからな。魔物には負けないさ」

「だったら、僕も同じですよ」

「はは、そういう性格は好きだな。そういえば、お前はギルドには所属していないのか？」

「僕は入っていません。ミトンは？」

「いや、俺も未所属だ。だが、いつもは気の合うパートナーが一緒に。魔物を確実に仕留めるなら、仲間が必要だろ？」

「……魔物は目的ではないですから」

「どづいづことだ？」

そのとき、一瞬の間が訪れる。

「ミトンも当然聞いたことありますよね？ あの噂を」

「噂？」

「魔王、ですよ」

一瞬、ミトンの眉が微かに動いた。

魔王。

それはこの地方に古くから伝わる”女神伝説”の登場人物である。女神伝説の内容は他愛の無いもので、悪い魔王が女神に選ばれた戦士によって退治される、というものである。

世界各地でこのような伝説は数多く残されているが、いずれもただの伝説で終わっている。それに対して、この地方だけは少し異質である。ただの伝説とする人間はもちろんいる。ただし、それはごく少数であり、大多数は女神伝説を実話として信じている。

歴史書を眺めてみると、そこには幾つもの動乱が記されており、そしてそれを沈静した英雄の名も記されている。長い歴史の中でよくあること、と部外者であればそう言うだろう。だが、この地方の人々は口を揃えてこれを”魔王”と”女神の戦士”の戦いと呼んでいる。学者といった知識人ですら例外ではない。

おそらく最後の魔王とされているアティラスの存在が、千年前と伝説にしては新しいことが手伝っているのだろう。この地方の首都バリプレート建国時期とも重なっており、不信者の中にはバリプレート王家が歴史に脚色を付けた、とする者もいるが。

「別に気を遣ってくれなくてもいいですよ。おかしいってことは分かっていますから。でも、僕はどうしても探さないといけないんで

す

「まだ”噂”だけだとしてもか？」

リユートは静かに頷く。そして、そのまま横になる。

「すみません。今日はそろそろ休ませてください」

「そうだな」

ミトンも横になる。そして、夜は静かに更けていく。

2 ガイタ村と狼

「あと一時間もかからないだろう」

そう言っつて、ミトンはリユートを先導する。昨日と変わらない接し方だ。しかし、リユートのことを気遣っつてか、「魔王」という言葉は一言も発していない。

正直なところ、おかしな奴と思われても不思議ではない。この地方の人間は、魔王の存在を信じてはいる。魔物が現れ始めた頃は、魔王誕生の噂で大騒ぎとなった。しかし、この三年もの間、魔王は人々の前に姿を現さなかつた。次第に騒ぎ立てる者は減っつていき、今では一部の魔王崇拝者くらいとなつてゐる。旅先でも何度も笑ひものになつた。

そのためか、リユートはこのミトンの態度にやや違和感を感じてゐた。だが、これから魔物退治を共にする者同士。わざわざ気まぐしい思いをする必要はない。ミトンもそう考へてゐるのだろう。だから、リユートもあえて「魔王」という言葉を避けた。

そのような状況のまま二人は足を進め、ようやくガイタ村を視界に入れた。

狼の村ガイタ

村は静まり返つてゐた。

昼間だというのに、外を歩く人はいない。いや、それどころか人の声すらない。事情を知らない人間であれば、廃村と勘違ひしてもおかしくはないだろう。だが、既に死者まで出しているという事情を考へれば、あながち過剰とも言えない。

しかし、話を聞かなければ依頼も何もなし。ミトンも同じ考へな

のだろう。一直線に近くの民家へと歩いていく。そして、その戸をノックした。

「誰かいるか？ 魔物退治の依頼を受けた者だが」

少しの静寂。

ミトンがやれやれと背を向けようとしたとき、その戸が開いた。現れたのは、その家の主であろう中年の男である。

「あんた……今の話は本当かい？」

「嘘をつくために、わざわざ魔物のいる村に来る奴なんているか。俺と、そいつの二人で退治してやる」

村人は驚き、交互にミトンとリユートの顔を見る。

「正気かい！？ 魔物だよ、魔物っ！ あんたみたいな若いのが、しかもたった二人でなんて」

「強さと年齢は関係ないだろう。バリプレート聖騎士団のエレヴァ・クレシアだって、それほど変わらない歳のはずだ。不安だったら、俺の力を少し見せてやってもいいぞ？」

そう言い、ミトンは剣の柄に手を掛ける。それを見て、慌てて男は口を開く。

「わ、悪かった。ちょっと驚いたもので……。村のために、わざわざ来てくれた戦士様に失礼だった。許してくれ」

分かればいい、そう言わんばかりの表情をしたミトンは、剣から手を離す。その脅迫まがいの行為を一步退いた様子で見ていたリユートは小さく溜息をつく。

ミトンとリユートは長老の家へと案内された。

長老の家は、他の家よりも一回り大きく、中には広間があった。おそらく、普段はここで村の行事などを話し合うのであろう。その部屋で少し待っている、七十歳を超えているであろう老人が姿を現した。威厳……とまではいれないが、老人ならではの落ち着いた雰囲気漂わせている。

老人は一礼をして席に着く。

長老の話によれば、その魔物は二、三日に一度の頻度で村に現れるらしい。今のところ時刻は決まって夜。そして、その外見は、この地方に生息する小型の狼キツズウルフのそれと同じらしい。しかし、その獠牙さは明らかに異なっているとのことだ。

見れば分かる、と長老は断言した。

「狼……」

ふとリユートの口から言葉が漏れる。だが、言葉はそれ以上続かない。そのリユートをミトンは横目で見ると、何か言葉を発するわけでもなく、すぐにその視線をリユートから外す。外れた視線の先、部屋の窓から見える山。それこそが狼の生息していると噂されている山であった。

ガイタ北の山

目的の山は、ガイタ村からそう遠くは離れていない。ほんの一時間も歩けば到着できる距離だ。豊富な資源に恵まれているこの山は、ガイタ村の人々にとって生活の一部であり、整備された山道もある。その山道に久方ぶりの人影が現れる。

「現れないものだな」

そう言ってミトンは立ち止まる。そして、周囲を見渡した。同行していたリユートも同じくその足を止めた。二人が山に入ってから、既に二時間が過ぎようとしている。しかし、魔物は姿を現さない。

「夜って話ですし。昼間は隠れているのかもしれないね」

「随分と臆病なもんだ。とはいえ、”元”はキッズウルフ。分からんでもないか」

「”元”、ですか……」

「どうした？」

「……いえ」

ミトンの問いをリユートは流そうとする。しかし、言葉を言い切る前にリユートは首を横に振った。

「やっぱり、ミトンもこの魔物騒動は、獣の仕業だと思いますか？」
「それしかないだろう？ キッズウルフと聞いているんだからな」

その自信に満ちた答えにリユートは肩を落とす。今回も同じなのか。その言葉がリユートの心の中を流れる。

世間を騒がせている魔物騒動。その現場に、リユートはこれまで何度も足を運んだ。しかし、結局のところ、それらは凶暴化した”獣”によるものでしかなかった。確かに、何の武力もない人々からすれば脅威であろう。だが、”魔王”を追う人間からすると物足りない。

そのリユートを見たミトンは、やれやれと言った表情で口を開く。

「気にしているのは”魔王”か？ 正直、俺には理解できんな。俺

もこの地方の出身だ。魔王がいらないとは言わん。だが、いないのであれば、それでいいだろう。こだわる必要などないはずだ」

「……いや、魔王はいます」

その言葉は、まるで呟くかのように漏れる。だが、力を感じる。

それに対し、ミトンは言葉を返そうとする。

そのときだった。

ミトンの言葉を遮るかのように、近くの茂みが揺れる。リユートとミトンは、警戒しながら、その茂みを見つめる。そこに現れたのはキツズウルフだ。見たところ、おかしいところはない。おそらく魔物ではないのだろう。

「……一匹か」

ミトンは周囲を見渡す。

臆病な性格で知られるキツズウルフは群れで行動する。しかし、どうやら周囲に仲間はいないようだ。ミトンは、茂みから現れたキツズウルフに近づこうとする。それに反応したキツズウルフは、すぐに逃げ出した。そこに獰猛さはない。

「どうやら”魔物”ではなかったようだな」

「そうですね。……僕はもう戻ります。これ以上は手掛かりもなさそうですし」

先ほどの会話に気まずさを感じたのか、リユートはミトンに背を向ける。ミトンもあえて引き止めはしない。

「分かった。俺はもう少し残る」

ミトンの言葉の後、リユートは村へと足を進めた。

リユートの姿が見えなくなったことを確認し、ミトンは再び森を見渡す。先ほどの狼の気配はもうない。森に残るのは、木々の奏でる音だけである。それは静寂と言ってもいいだろう。

ミトンは静かに瞳を閉じる。全身の神経を研ぎ澄ます。手掛かりはないとリユートは言った。しかし、ミトンの考えは異なっていた。

遭遇しない狼。

群れない臆病者。

静寂の森。

ミトンにとって、それら全てが不自然に思えた。だからこそ、そこからミトンは一つの推測を導き出した。

「……これは想像以上だな」

そう呟いたミトンは、そのまま森の奥へと足を進めた。

3 プロローグは終わる

狼の村ガイタ

「……」

リユートは空を見上げていた。その先にあるのは月である。昨日と変わらぬ大きな満月。その月をただじっと見つめていた。

「そんなに月が好きか？」

いつの間にか隣にいたミトンが声を掛ける。昨日もこんな感じだったか。リユートはある種のデジャブを感じる。

「気分を落ち着けていただけですよ」

「なるほど。心の準備は大切だからな。それで、聞いたんだろ？」

ミトンの問いにリユートは静かに頷く。

数刻前、狼の遠吠えが聞こえた。

村長の話では、魔物が現れる日には、決まってこの遠吠えがあるという。頻度は多いと聞いていたが、まさか村へ訪れた当日とは。

リユートは何気なく剣を抜く。

「気持ちを落ち着けているというより、猛る気持ちを抑えていたってどこか。気合が入っているじゃないか」

「……」

そのときだった。

再び遠吠えが聞こえる。その声は大きい。先ほどよりも近づいて

いる証拠である。

リユート達は、適当な家の屋根に上る。そして、声の方角へと目を凝らした。まだ何もいない。

二人は静かに待った。緊張のためか、普段は存在すら忘れていた心臓の音がはつきりと聞こえる。これから始まる命の駆け引きまでのカウントダウンだ。

「来た」

ミトンは小声でそう言った。

リユートも大地を駆ける一つの影を確認する。その影は次第に大きくなる。そして、月明かりの下、二人はその姿をはつきりと見た。話で聞いていた通り、外見はこの地方に現れるキッズウルフのそれと同じである。しかし、この殺気は何だ？ リユートは一瞬身震いする。

そのとき、隣で剣が鞘を走る音が聞こえる。息を呑み、魔物から目を離さないようにし、リユートも自身の剣に手をかけた。

「どつちが先だ？ たかだか狼一匹。二人だと逆に難しい。一応聞いておいてやるよ」

「僕が行きます」

リユートは剣を引き抜く。そして、魔物に向かって走り出す。

その殺気に気づいた魔物は、逃げるどころかリユートに襲い掛かってきた。そして、二つの影が重なる。

その直後、一方の影が崩れ落ちた。

「やるもんだな」

そう言いながら、ミトンは崩れ落ちた影に近づく。そこには魔物

が横たわっている。

「……まあ、詰めめ甘さはご愛嬌ってことにしておこうか」

次の瞬間、倒れていた魔物がミトンに飛び掛かる。

だが、ミトンは動じない。ほらな、という表情で一瞬リユートの方を見る。そして、身体を反転させ、魔物を斬り付ける。それによって魔物はその動きを止めた。

「俺も仕事をしとかないな」

そう言いながら、ミトンは再びリユートの方を向く。リユートは黙ったままミトンの方へと歩く。そして、横たわった魔物を見た。

動かなくなったその姿は、もはやキッズウルフと区別がつかない。

「……」

リユートは剣についた血を静かに拭う。それは、この依頼の終わりを意味している。微かな空虚感が胸を走る。

結局、ここにも”魔物”ではなく、”獣”しかいなかった。

「そろそろ行くぞ。俺に死体を眺める趣味はないんでな」

ミトンの声がある。その言葉の通りだ。これ以上ここにいても、得られるものは何もない。リユートはミトンと共にその場を離れた。

魔物が討伐されたことを知ると、村人達は揃って大歓声を上げた。夜中だというのにお祭り騒ぎ。大事に貯蔵していた食材を全て使い、村人達のご馳走を用意する。もちろん主役は二人の英雄だ。ミ

トンは相変わらずの態度。そして、リユートは少し慣れない感じで祭りに参加した。

しかし、祭りが始まって間もなく、ミトンはその姿を消した。どこかで休憩をとっているのだろう。リユートはそう思った。しかし、朝になってもミトンが帰ってくることはなかった。

朝日の差し込む部屋。

リユートは窓の外を見る。昨日とは違い、人の姿がそこにはある。祭りの後片付け、中にはまだ祭り気分の人もある。退屈な片付けのはずなのだが、村人達の表情は明るかった。心なしか、リユートの表情が緩む。しかし、リユートはすぐにミトンのことを思い出す。

出会う人々に尋ねてみた。しかし、昨夜以降、誰一人ミトンを見かけた者はいなかった。朝食の席にもいなかった。長老の家にも訪れてはいなかった。

もともと急な同行人。無理に足並みを揃える必要もないだろう。村での挨拶を終えたリユートは、一人でガイタ村を出発した。

村が見えなくなつて、さらに少し歩いた。行きとは異なり、森林からは不気味さを感じない。木漏れ日は、その先にある晴れ渡った空の存在を証明している。微かに吹く風は心地よい。

そう感じたときだった。リユートを呼び止める声がある。その声には聞き覚えがある。リユートはその声の主の名を呼びながら、その方向を向く。

「ミトン！」

「思ったより早くてよかった。さすがに昼を過ぎれば、ここから離れるつもりだったからな」

岩陰に座り込んでいたミトンが立ち上がる。特に何も変わった様子はない。

「どうして一言もなく村から？」

「魔物は退治した。それで俺の仕事は終わりだ。本当はリユートに会うつもりもなかったのだがな」

そう言いながら、ミトンを剣を抜く。それを見たリユートは、反射的に間合いをとる。

「何の……つもりですか？」

「勘違いするな。俺達はここでお別れだ。だから、一つだけ贈り物をやるうと思ってるな」

「贈り物？」

「そうだ。リユートも抜け」

リユートはミトンの言葉の意味を理解できなかった。だが、ふざけている様子はない。自信に溢れたその表情に負けたのか、リユートはミトンの言葉に従い、剣を抜いた。

「一本勝負だ。来い」

そう言つて、ミトンは手招きをする。

リユートは一呼吸の後、すぐにその剣を構える。視線の先に立っているミトンはまだ剣を構えていない。だが、その余裕の表情は、その準備が完了していることを伝えるのに十分だった。

リユートが動く。一気にミトンに詰め寄り、そしてみね打ちを命中させた。

そう、それは確かに命中したはずだった。だが、次の瞬間、倒れていたのはリユートであった。

何が起きた？ それすらリユートは理解できない。

「これがお前自身の立ち位置だ」

その言葉の後、足音が聞こえる。おそらくここから立ち去るつもりだろう。だが、リユートにとってはどうでもよくなっていた。そのリユートの耳にもう一言だけ聞こえた。

「……魔王も、大体こんなもんだ」

リユートの言葉を待つことなく、その足音は遠ざかっていった。一方のリユートはしばらくその場で空を眺めていた。木々の隙間から覗く陽光は、少年にとって眩しかった。

プロローグは幕を閉じる。この一ヶ月の後、女神伝説の伝わるこの大地で、一つの物語が幕を開く。

悪夢 消えた姉

『……ろさせない』

暗闇の中、その耳に声が聞こえた。

懐かしい声だ。しかし、その声にいつもの優しさはない。ただ強い覚悟だけを感じる。

『……殺させないっ！』

微かな月明かり。

それと同時に、その目の前に一人の女性の姿が映った。そして、その先にはこちらを向く巨大な獣の姿がある。

『リユートは殺させないっ！』

『姉さん……、姉さん！』

獣はその女性をくわえ、その場を去った。

絶叫。

月明かりの下、ただ悲しく、少年の発したその声はどこまでも響いた。

1 カルテラの噂

リユートは目を覚ました。

そこは深い森の中。鳥の声がどこからとも鳴く響き、木漏れ日は暗い森に微かな明かりを与えた。冷たい空気は清々しい。しかし、その中にありながらも、リユートの表情はその自然と対極であった。

「もう一年、か」

ふと言葉が漏れる。

リユートが見つめているのは、これから自分の進む先だ。空まで届きそうな大樹がそこにある。その大樹を見て、リユートは再び自分がこの大地に戻ってきたことを認識した。

首都バリプレートンの治める土地ビルナード。年中穏やかな気候であるこの土地は、女神伝説の残る地として世界でも有名である。そして、リユートが立っているのは、その東の境界に位置しているヴアルサという名前の大きな森である。

ミトンと別れてから一ヶ月が過ぎる。その間、リユートは一度このビルナードを離れていた。そして、自分自身をもう一度見つめ直してみた。しかし、やはりリユートの答えは変わらなかった。その気持ちを確認した後、再びこの大地に戻ってきた。

リユートは一呼吸置く。そして、静かに言葉を放った。

「魔王……必ずこの手で」

その強い気持ち音を音として確認した後、リユートは大きく一步を踏み出した。

大樹の村カルテラ

そこはカルテラという村。

大森林ヴァルサ内であり、大樹の根元あたりに位置している。この村の象徴ともなっている大樹は、この村を訪れる旅人の目印となり、また観光の中心ともなっている。小さいながらも村は活気に溢れていた。

リユートは大樹を見る。この村を訪れるのは初めてではなく、当然この大樹を見るのも初めてではない。しかし、何度見てもその存在には圧倒される。一説では、この地方に伝わる精霊ヨークを宿しているらしい。精霊など存在するはずもないと思いつつも、この大樹を前にすると、自分の考えの方が間違いではないかと惑わされる。これはリユートだけではなく、この地を訪れる多くの観光客も同じだ。

リユートは、まず宿へ向かった。さすがに訪れる客が多いこともあり、小さな村には似つかわしい立派な宿がある。リユートは迷うことなく、その宿へ向かった。

入口まであと十メートルというところであろうか。リユートの耳に村人達の噂話が聞こえる。

「み、み、見たんだっ」

「だから、何をだよ？ もう少し落ち着けて」

「だ、だから、幽霊屋敷だよっ！」

「幽霊屋敷？ ああ、そう言えば昨日マグの奴も言ってたか。突然建物が現れたって。本当なのか？」

「本当だともっ！ 嘘だと思うならお前も見てみるよ。西の方へ行けばすぐに分かるって！」

「ああ、分かったって。信じるって。だから、そんなに興奮するなよ。それにしてもおっかないよなあ。何かの前触れじゃないよな」

リュートの足が少し遅くなる。聞き込むほどではないが、気になる内容ではあった。だが、それ以上を聞くことなく、リュートは先へ進む。そして、目の前にある大きな宿に入った。

中に入ると、リュートと同じくらいの年頃の娘がカウンターに立っていた。胸には名札があり、そこにはアンナと書かれてあった。以前訪れたときには見ていない顔だ。おそらく新しい従業員なのだろう。

そのアンナは、満面の笑顔と明るい声でリュートに声を掛ける。

「いらつしゃいませ。一名様、お泊りですか？」

「一晩頼みます」

簡単にチエックインを済ませた後、アンナは背後の戸棚を開け、鍵を一つ取り出す。

「はい。これがお部屋の鍵です。二〇五号室。二階に上がって、左手に進んでくださいね」

一礼の後、リュートは鍵を受け取る。そのリュートをアンナは興味深そうに見つめる。

「観光……ではないですよね。その剣、もしかしてバリプレート聖騎士団への志願ですか？」

「いや、そういうわけじゃないんです」

「それじゃ、もしかして魔物ハンターの方ですか？」

アンナは大きく目を開けてリュートに問い掛ける。当たりではないが、外れというわけでもない。リュートは話を合わせることにする。

「そんなところですよ」

「すごいっ！ それじゃきつと強いんですね。はあ、マグもこれくらい勇敢だったらなあ……」

「？」

「あ、いえいえこつちの話ですよ」

少し首をかしげるリユートを見て、アンナは照れ笑いをする。そして、さらに話し掛けてくる。

「最近魔物が現れているそうですね。実は、もう一人魔物ハンターの方が泊まってるんですよ。バリプレードの依頼を受けて、カミツテへ行く途中だとか」

「カミツテへ？」

リユートは思わず聞き返す。

カミツテとは、このカルテラの北西に位置する村である。この地方に伝わる女神伝説の”女神”が生まれ育った村として有名であり、今でもその女神を祭っている。首都バリプレードと並び、この地方の顔とも言える場所だ。

しかし、部外者を快く思わない民族性であり、外界との接触は極めて少ない。実はリユートも門前払いを受けた一人である。

それにしても、バリプレードからの依頼。カミツテ。魔物ハンター。意識しすぎなのだろうが、リユートの中でこれらの単語が大きく響く。

「バリプレードで何かあったんですか？」

「私も詳しくは知らないんですけどね。亡霊騒ぎですって」

亡霊？ と、リユートは首をかしげる。魔物騒ぎならよく耳にす

る。だが、亡霊というのはリユートにとって初耳だった。その亡霊を抑えるために、女神様の力を借りるというわけか。まるで祈禱師のようだ。

そのとき、リユートは宿の外で耳に入れた噂話を思い出す。

「そういえば、さっき外で幽霊屋敷がどうのって話を聞いたんですけど」

「え？ ああ、さてはマグね。もう、仕方ないわね」

また出たマグの名前にアンナは小さな溜息を付くが、再び笑顔に戻る。よほどのこのマグには頭を悩まされているのだろう。

「バリプレートの亡霊騒ぎとは別の話です。昨日か一昨日あたりらしいんですけど、森の中に突然建物が現れたらしいんですよ。すごく古い建物らしくて、中に人の気配もない。だから、幽霊屋敷なんですって」

「そうですか。バリプレートの亡霊といい、最近はこんな話が流行っているんですか？」

アンナは慌てて首を振る。

「とんでもありません。バリプレートの方は分かりませんが、うちのはただの勘違いだと思います。普段は人が歩かないような場所って聞いてますし」

普段は歩かないような場所であれば、たまたま昔の建物が見つかっただけでも考えられる。しかし、それだけで騒ぎ出したりするものだろうか。表で見た人物の様子をリユートは思い出す。かなり興奮していたのを覚えている。

「その建物のある場所を教えてくださいませんか？ 少し見てみたいんです」

「本気ですか？」

「少し気になります。もしかしたら、何か魔物がいるかもしれませんし」

男の人はみんなこうなのか、といったアンナの表情。声には出さないが、何となくリユートにはそう伝わった。しかし、リユートは気にしない。魔王への手がかり、その可能性があるのだ。

アンナから場所を聞いた後、リユートは二〇五室に入った。しかし、荷物を置いただけ。部屋を構成する木々の香りを感じる暇もなく、リユートはすぐに部屋を出た。

目指す場所は、もちろん幽霊屋敷だ。

急ぎ足のリユートは、カウンターのアンナの見送りを受け、そのまま宿を出た。

2 護って欲しいと少女は言った

精霊の棲む森ヴァルサ

暗い森は静寂に包まれている。しかし、そこに不気味さはない。優しい森の香りは、むしろ安らぎを感じさせる。

その森の中をリユートは一人進んでいた。時折現れる獣達を追い払いながら、既にカルテラから一時間ほど歩いただろうか。アンナから聞いた情報を頼りに、リユートは幽霊屋敷を探していた。

しかし、広大な森の中、しかも一般道から外れた場所である。幽霊屋敷はなかなか見つからない。

一度戻るべきか、とリユートは考える。そして、手元の地図を見た。アンナの付けた印が目立っている。それほど距離はない。しかし、よくよく考えれば、アンナの情報もまた人からの噂だ。正確な位置をアンナが知っていたわけではない。

リユートは溜息をつく。もう少し探したら、一旦戻ろう。そう決めたリユートは、さらに森の奥へと進んだ。

『
』

ふと何かが聞こえた気がする。

それは声のように感じる。男か女かも分からない。ただ何故かその方角は分かった。リユートは迷うことなく、足を進める。

しばらく歩いた。すると、その目の前に一軒の屋敷が姿を現す。おそらく、これが幽霊屋敷だ。

噂の通り、建物はかなり古風である。少なくとも現代のカルテラの文化とは異なっている。しかし、不思議とそれほど老朽化は感じられない。

リユートは建物の玄関に立ち、扉に手を掛ける。扉に鍵はかかっておらず、リユートは建物の中に入った。

幽霊屋敷

二階建ての屋敷はそれほど広いものではなかった。

生活するにはさっぱりとしており、誰かの別荘、そんな雰囲気漂わせるものであった。窓から適度な明かりが入っており、内部はそれほど暗くはない。幽霊屋敷というには少し物足りなくくらいである。

ただ、人の気配はなく、床のきしむ音は孤独を実感させるのに十分であった。もつとも、それに慣れたリユートにとっては、特に気になるものではないが。

一階を探索し終えたリユートは、建物の二階へと上がる。いくつかの部屋がある。ひとまず、リユートは手前の部屋のドアを開けようとする。

『
』

再びリユートの耳に何かか聞こえた気がする。この奥……なのか？ 一瞬、リユートに緊張が走る。呼吸が止まり、心臓の音が強く響く。

覚悟を決め、リユートはドアを開く。ドアの音は静かに、しかし確かに響きわたり、それが緊張を一層引き立てる。リユートは部屋の中へと一步を踏み出す。無意識のうちに、片手は剣の柄を握り締めていた。

周囲を見渡す。特に変わったものはない いや。

リユートはゆっくりと歩く。その目の前にあるのは小さな円卓だ。そして、その上には位牌が一つ置かれていた。幽霊屋敷らしいと言

えばそうである。先ほどからの”声”は、これが元凶なのか？

リユートは位牌を手に取る。何か書かれている。リユートはそれを音にする。

「ミゼファン……オン………カリィスペルク………ネーゼシア
ン………？」

やや長いがおそらくそれは人の名前だ。この屋敷の主。そう
思うと、リユートはふと寂しさのようなものを感じた。そこに感じ
られた孤独は、どこか近しくもある。リユートは黙ったまま位牌を
置く。そして、少し目を閉じる。

静かな黙祷。

それは位牌の主へか。それとも自分のためか。リユートはただ黙
祷した。そのときだった。リユートは何か違和感を感じる。

「（これは………光？）」

リユートはゆっくりと目を開く。

光の主は先ほどの位牌である。リユートは位牌から目を離すこと
なく、ゆっくりと距離を置く。そして、一瞬光が強まった。その眩
しさにリユートの脳は、その目を閉じることを命令した。

光が収まる。

リユートは再び、先ほどよりもゆっくりと目を開く。その直後、
リユートは目の前の光景に驚く。

そこには、一人の少女が立っていた。

「（幽霊か？）」

それが最初の印象であった。

幽霊屋敷と呼ばれた場所で、その少女は突然目の前に現れた。当

然といえは当然の印象であろう。

年齢はリユートと同じくらいであろうか。整った顔立ちをしているものの、その表情はどこか弱弱しい。透き通るような白い肌や、飾り気のない服装は、さらにその弱さを強調させていた。しかし、その瞳だけは、少女の容貌に対して異端であった。

強い威圧を与えるような金色の瞳。それは強く印象的であった。

「……………」

少女は何も喋らず、ゆつくりと周囲を見渡した。何かを確認しているかのようである。一瞬リユートと目を合わせ、今度は静かに瞳を閉じる。胸に手を当てている。まるで心臓の音を確認しているかのようなようである。

その間、リユートは動けない。口を動かすことすらできなかつた。しばらくすると、少女はその瞳を開く。再び現れた金色の瞳は、今度は、はっきりとリユートを捕らえていた。

少女は動かない。まだ何かを考えているようだ。

その静寂に耐えきれなくなり、ついにリユートがその沈黙を破る。

「君は……………その位牌の？」

「……………はい」

少女が返事をした。

見た目の印象通りの弱弱しい声。その透き通るような細い声は、少し賑やかな町中ではまず聞き取れないであろう。

リユートは質問を続ける。

「幽霊……………なのか？」

「いえ……………」

否定した少女は少し俯く。やはり何かを考えているようである。幽霊ではない、か。この状況でそれを信じるとするのも難しい。しかし、やや緊張状態にあるリユートは、その言葉の真実を考えるまで至らず、ただ少女の言葉を受け入れた。再び静寂が訪れ、今度は少女がそれを破る。

「あの……」

そこで一瞬言葉は止まる。リユートはただ静かに次の言葉を待つ。

「あなたは……私を護ってくださいか？」

「!?!」

その言葉は唐突で、リユートに戸惑いを与える。一方の少女は黙ってリユートを見つめたままである。

リユートは少し考え込む。

少女の言葉の意図は分からない。また、分かったところで、リユートには、“魔王”という目的がある。正直、この少女の願いを受け入れている余裕などない。そもそも、目の前の少女は、か弱い容姿をしてはいるものの、位牌から現れているのである。その素性は極めて怪しい。

しかし、リユートの頭の中である声が重なった。

『リユートが私を護ってよ』

それは、とても懐かしく、そして忘れることのできない声であった。

握る拳は強くなり、そしてリユートは少女を見る。

その金色の瞳は、まっすぐとリユートを捕らえたままである。

「……君を護る」

短い言葉。

それは自然にリュートの口から出ていた。不思議と迷いはない。ただ、自然に少女を言葉を受け入れられた。

「！ありがとうございます」

少女の表情が少し明るくなった。気がする。その少女はリュートの方へゆっくりと近づいてくる。目の前まで近づいてきた少女に対し、リュートは口を開く。

「僕はリュート。君の名前は？」

「ネーゼシアンです。……ネーゼと、呼ばれていました」

(ミゼファン・オン・カリィスペルク・ネーゼシアン)

幽霊とも思えるその少女は、位牌に刻まれた名前を名乗った。

リュートは手を差し出す。その手に少女の手が触れたとき、リュートは初めてその手に温もりがあることを知った。

3 カミツテの鏡

大樹の村カルテラ

幽霊屋敷から一時間ほど歩き、リユート達はカルテラに戻っていた。道中で何度か獣を追い払う場面はあったものの、大樹のおかげで迷うこともなく無事に戻ることができた。

意外だったのはネーゼだ。道中で、リユートは何度かネーゼに気遣いの言葉をかけた。しかし、その道中でネーゼが疲れる素振りを見せることは一度もなかった。

幽霊屋敷で出会った少女。

その素性は分からない。考えるまでもなく、謎に満ち溢れた存在だ。とはいえ、護ると約束した手前、これからしばらくはリユートと一緒にいることになる。これからの話も必要だ。

「ネーゼ、どこかで休まないか？ 今後の話もしておきたいし。それに、何か食べたくないか？」

「え……と。お願いします」

相変わらずの弱々しい返事だ。しかし、どうやら食事はとるようである。やはり幽霊というわけではないのだろう。

リユートはふと自分の手を見る。幽霊屋敷で触れたネーゼの手には、確かに温りがあった。

「いらっしやいませ。二名様ですか？」

「はい」

「では、こちらの席へどうぞ」

店員は手際よくリユート達を誘導する。案内された席には大きな窓があり、その先には大樹が見える。カルテラで一番人気の店。その店内で、特に景色のよく見えるいい席だ。

壁に掛けられた時計を見ると、既に十五時を回っている。昼には遅い時間のためなのか、人気店の中は空いていた。何人かの先客達は、お茶と共に自身の時間を楽しんでいる。これであれば、ゆっくりと話をしたところで店の迷惑にもならないだろう。

席についたリユート達に店員がメニューを差し出す。

「ネーゼ、好きなものを選んでいいよ」

その言葉と同時に、リユートはネーゼにメニューを差し出す。ネーゼは促されるままにメニュー受け取り、それを開く。そして、まるで物珍しいものでも見るかのように、ゆっくりとページをめくった。

「あ、あの……このサンドイッチと、それとミルクティーをお願いしてもいいですか？」

「それだけでいいのか？」

「はい」

「そうか。じゃ、それをお願いします。そうだな……僕はこの定食を。あとお冷も」

「かしこまりました」

店員は明るい声を出しながら注文をメモし、そのまま厨房へと向かう。そして、二人の間にしばらくの時間が訪れる。

「これからのことを聞いてもいいかな？」

「はい。お願いします……リユートさん」

「リユート、でいいよ。そっちの方が僕も楽だから」
「はい……リユート」

ネーゼはぎこちない返事を返す。それも仕方ないだろう。護ると約束したとはいえ、まだ出会ったばかりなのだ。お互いのことなんてほとんど知らない。不安なことも多いだろう。

リユートは話を続ける。

「それで、とりあえず僕は何からネーゼを護ればいいんだ？ 何かに狙われていたりするのかわ？」

「いえ……その……」

ネーゼは口籠る。話せないというよりは、言葉を探しているようである。急ぐ必要はない。リユートはゆっくりと言葉を待つ。

しばらく考えた後、ネーゼは口を開く。

「行きたい場所があります。そこまで連れて行って欲しい……です」

行きたい場所。つまりは道中のボディガードということなのだろう。確かに、女の子の一人旅というのは何かと不安なものだ。しかし、たったそれだけを言うのに、どうしてそこまで迷う必要があるのか。

さらなる疑問を感じながらも、リユートは話を進める。

「分かった。それで、どこまで連れて行けばいいんだ？」

「はい……」

返事と同時に、ネーゼは一度視線を落とす。そして、ゆっくりと再びリユートの方を見た。

リユートは黙ってネーゼの言葉を待つ。

「鏡……」

戸惑いながら、ネーゼはその言葉を出す。しかし、何かを決心したのか、ネーゼは言葉を続けた。

「鏡の場所へ連れて行ってください」

そこまで言いきった後、ネーゼは目を閉じ、そして俯いた。少し震えているのが分かる。

一方のリユートは首をかしげる。鏡など珍しいものではない。当然この店にもあるし、少し小洒落た店へ行けば、女の子向けの手鏡だっけ売っている。だが、そういう意味ではないのだろう。ネーゼの様子を見れば、それくらいはリユートにも理解できる。

特別な鏡、あるいは鏡という名をした地名かもしれない。いずれにしても、リユートには全く見当がつかない。

「ネーゼ、顔を上げてくれないか？ 僕にはよく分からないんだけど、鏡ってのは何のことなんだ？」

「その……カミツテの鏡……です」

カミツテの鏡？ と、その単語が頭を流れたところで、リユートはあることを思い出す。ネーゼの持つ金色の瞳。これは女神発祥の村と呼ばれるカミツテの象徴だ。世界広しといえども、これを持つのはカミツテの民だけと言われている。

カミツテの民となれば、幽霊屋敷の位牌の件も何となく説明がつきそうだ。カミツテの民には、“カミツテの奇跡”と呼ばれる不思議な力が宿っていると聞く。何でも、あらゆる怪我、病気を治癒することができるらしい。

そんな不思議な力を持っているのだ。位牌から現れるくらいのこ

とも不可能ではないだろう。その理由までは分からないが、おそらく儀式か何かなのだろう。

と、今はどうでもいい話だ。リユートは思考を”鏡”に戻す。もし、その鏡がカミツテにあるのであれば、カミツテへ行きたいと言わずだ。あえて”鏡の場所”と言っからには、カミツテとは異なる場所にあるのだろう。その在り処すら分からない可能性もある。

「ごめん。僕はその鏡を知らないんだ。それはどこにあるんだ？」
「それは……その……分かりません」

リユートの予想通りだった。

所在の分からない鏡を探すとなれば、かなり骨が折れる。せめて手掛かりくらい欲しいと考え、リユートはさらに尋ねる。

「カミツテでも分からないか？」

ネーゼは黙り込む。

これは困った。そうリユートが思ったときだった。ネーゼがもう一度口を開く。

「あの、カミツテの場所はご存知なのですか？」

「カミツテ？ ああ、それなら大丈夫だ。ちょうどこの近く……たぶん馬車で数日もあれば着くかな」

「お願いします。カミツテまで連れて行ってください。カミツテへ行けばきつと」

手掛かりはカミツテか。

行方知れずのカミツテの鏡を探すためにカミツテへ行く、ということにリユートは少し釈然としないものを感じる。それでも、何も手掛かりがないよりはいい。

それに、カミツテというのは、リユートにとっても悪い行き先ではない。女神発祥の地であれば、魔王の手掛かりについても期待できる。以前は門前払いを受けたが、今回は同胞が一緒なのだ。その心配もないだろう。

リユートはネーゼの方を見る。ネーゼは真剣な瞳でリユートを見つめている。

ひとまず、次の行き先は決まった。

「分かった。カミツテへ行こう」

リユートがそう言ったときだった。店の奥から注文を持った店員が二人の席までやってきた。

4 孤独を恐れる孤独な少女

食事を終えて、リユートとネーゼは宿へ向かって歩いていった。その道中で、二人はカルテラという村に触れることになる。幽霊屋敷の噂はあるものの、この村はいたって平和だ。

リユートはネーゼの様子を見てみる。ネーゼは物珍しそうに村の様子を眺めていた。

あの幽霊屋敷の中にいたのだ。それでなくても閉鎖的なカミツテの民。もしかすると外の世界など見たことがなく、見るもの全てが珍しいのかもしれない。これから一緒に行動することを思えば、もう少し打ち解けていた方がいいだろう。そう考えたリユートは、ネーゼを連れて村を見て回ることにした。

見るものにネーゼは驚きを見せる。その姿を見て、リユートはまるでこれが観光であるかのように錯覚する。いつ以来だろう。こんな気分になるのは。

しばらく村を見て回り、二人は宿の近くまで来ていた。その宿はもう目の前に見える。

そのとき、ネーゼの足が突然止まる。それに気づいたリユートは、ネーゼの方を振り向く。

「どうしたんだ、ネーゼ？ もう少しで今日泊まる宿だけぞ」

「あの……いえ……」

ネーゼはその場に座り込む。それを見たリユートは慌ててしゃがむ。そして、すぐにネーゼの顔色を確認した。

「ネーゼ、大丈夫か！？ どこか具合が悪いのか！？」

リユートはネーゼの肩に手を触れる。今にも折れてしまいそうなその肩は、少し震えていた。リユートは少し後悔する。やはり疲労を隠していたのか。こんなことなら、早く宿で休ませるべきだったが、不幸中の幸い、その宿は目の前である。リユートは立ち上がる。

「待っていてくれ。すぐに誰かを呼んでくる」

リユートはネーゼから離れようとする。しかし、リユートは何かに引っ張られるのを感じた。振り返ると、震えながらも、しっかりとリユートの服を掴むネーゼの姿があった。

「お願いです。一人は……嫌です」

「だけど」

「お願いです……」

辛さと必死さの入り混じったような表情で、ネーゼは小さく声を絞り出した。それは優柔不断な少年の動きを止める。

すぐ目の前にある宿に入れば、おそらく店員のアンナがいるはずだ。どう考えても、すぐに宿へ向かった方がいい。しかし、そう考えながらも、リユートはその場を動くことができなかった。

困ったリユートは辺りを見渡す。人影はない。いや、ちょうど宿から出ようとする二つの影が見えた。

一人はアンナだ。もう一人は腰に長剣を携えた青年である。おそらく、宿に宿泊していた”もう一人の魔物ハンター”なのであろう。しかし、その服装にはやや洒落っ気があり、そこからは魔物との戦いなど想像できない。

「それじゃ、ありがと」

「はい、お気をつけてください。また来てくださいね」

「いや、アンナちゃんみたいなかわいい子に、またって言われたら断れないよ。商売上手なんだから。また来るよ。さてと。ん？」

その青年がリユート達に気づく。その目には、震える少女とその介抱をする少年が映る。事態に気づいた青年は、急いでリユート達の方へ駆け寄る。アンナもそれに続く。

「その子、大丈夫？」

「体調が悪いようでしたら、どうぞ中へ。ベッドもお貸しできますので」

助かった、とリユートは思う。

一方のネーゼはまだ震えている。震えながらも、その手は強くリユートの服を握り締めたままだ。心なしか、リユートはその力が先ほどよりも強くなっているように感じた。

「大丈夫だ。すぐに休める」

「私……まだ……」

そのとき、その様子を見ていた青年が動いた。

「何かやばそうだし、とりあえず俺は医者を呼んでくるよ。確か、すぐそこだったはず。二人はその子をベッドに寝かせておいて」

そう言い残して、青年は医者のところへと走り出した。一方のリユートとアンナは、ネーゼを宿の中へと運んだ。

宿へと入り、アンナがカウンターのすぐ横にあるドアを開く。その先の簡素な部屋は、おそらく従業員用の休憩室なのだろう。アンナは急いでベッドの用意をして、ネーゼを寝かしつけた。横になっ

て楽になったのか、ネーゼは先ほどよりも落ち着いているように見

える。

しばらくして、先ほどの青年が医者を連れて現れる。

「異常はありませんね。ただの疲労かと思います。今日はゆっくりと休ませてあげてください。何かあれば、またお呼びください。今日は診療所にいますので」

「ありがとうございます」

そのまま医者は部屋を出る。見送りのため、アンナもその後が続いた。医者連れて来た青年は、いつの間にかいなくなっている。残されたリユートはネーゼを見る。ネーゼはいつの間にか眠っていた。よほど疲れていたのだろう。やはり早めに休ませるべきだった。そう思ったとき、ネーゼのうわ言が聞こえた。

「一人は……嫌です……」

暗い闇。

そこにあるのは大きな鏡。

その鏡は闇を映し続ける。

その前に白い光が現れる。

そして、その光は少女を装い鏡を見つめる。

しかし、鏡は少女を拒み、その姿を映さない。

少女は独り、静かに立つ。

「……？」

ネーゼは目を覚ます。その視線の先にあるのは、見覚えのない天井である。ネーゼはゆっくりと周りを見てみる。やはり、そこはネーゼにとって見覚えのない部屋であった。

不思議に思ったネーゼは、ゆっくりと身体を起こす。気づけば、寝巻き姿になっている。

ネーゼは今の状況について考えてみる。しかし、何一つ思い出すことができない。

さらに考えようとしたところで、部屋のドアが開く。そして、ネーゼにとって見知らぬ少女アンナが入ってきた。

「よかった、気がつきましたか」

「あの……ここは……？」

「ここは、カルテラが誇る宿フォレストナイトよ。なんてね。でも本当によかったです。心配しましたよ。あ、すぐにリユートさんも呼んできますね」

「カルテラ……？ リユート……？」

部屋から出るアンナを見ながら、ネーゼは意識を失う前のことを少し思い出した。

ネーゼは、もう一度だけ周りを見てみる。目に映るのは、よく手入れされた簡素な部屋。ただそれだけである。それを確認した後、ネーゼは大きく息を吐いた。

しばらくして、リユートを連れたアンナが再び部屋に入ってくる。ネーゼの様子を見て、リユートの表情は緊張から安堵に変わる。

「ネーゼ、大丈夫そうでもよかった。だけど、まだ無理はしない方がいい」

ネーゼは促されるまま横になる。しかし、眠るのは怖かった。夢を見るのが怖かった。そこにある孤独が怖かった。

ネーゼは、目の前に座っているリユートの服をそつと掴む。

「どうしたんだ？」

リユートの言葉に、ネーゼは返事を返せなかった。震えているわけではない。しかし、その不安が伝わったのか、リユートは静かにその場に座り込む。

「大丈夫。しばらくここにいろよ」

その言葉を聞いて、ネーゼの心は少しだけ落ち着いた。しかし、まだ不安が消えたわけではない。

孤独な少女は鏡を求め、その鏡は少女を拒んだ。それは、ただの夢ではなく、少女にとっての現実であった。

それを知る少女は、何も知らない少年の服を強く握り締めた。強く。

5 ヨークの石碑

カルテラ特産の芋を主食とし、野菜サラダとスープを付けた素朴な朝食がテーブルに並ぶ。それをリュートは口にする。その隣にはネーゼの姿もある。食堂まで来れたことを考えると、体調の方はかなり回復しているようだ。しかし、目を覚ましてからまだ一日しか経っていない。油断しない方がいいだろう。

幸い、宿側の親切により、ネーゼが回復するまで無料で部屋を貸してくれることになった。アンナが言うには、これがカルテラの良らしい。

そのアンナが飲み物を持って現れる。

「飲み物のおかわりはいかがですか？」

「ありがとうございます。ネーゼは？」

「私もお願いします」

「はい。ネーゼさんも元気になってよかったですね」

そう言いながら、アンナは二人のカップに飲み物を注ぐ。

「心配を掛けました」

「いえいえ。でも、カミツテの民でも倒れたりするんですね」

「いや、あれは僕のせいです。ネーゼが疲れているのに気づかず、あちこち連れ回って。次からはもっと注意します」

「優しいですねえ。本当に出会ったばかりなんですか？ うちの…
…つとこっちはいいか」

本当にどうでもいい。リュートはあえて何も触れない。
そのとき、リュートは”ある青年”のことを思い出す。

「そういえば、あの人は？ 医者を呼んでくれた」

「ああ、カープさんですね。一昨日に話した魔物ハンターの方ですよ。うちの常連さんで、よく大樹を見に来るんですって。あの日は、早々と出て行きました」

「そうですね。お礼くらい言いたかったですけど」

「そろそろ出発しないと、依頼主から怒られるんですって」

そう言いながら、アンナは笑う。

そういえば、そのカープという青年の依頼主はバリプレートだ。

ネーゼの一件ですっかり忘れていたが、バリプレートでは亡霊騒ぎが起きている。魔王、当然その可能性もあるが。

リユートはネーゼの方を見る。ネーゼは黙ったままスープを口に運んでいる。食事といっても、先ほどからスープくらいしか口にしていない。まだ体調の方は万全でなさそうだ。

ひとまず焦る理由はない。そう考えたリユートは食事に戻る。亡霊騒ぎといっても、おそらくこれまでと同じく、意味のない”魔物”退治で終わるだけだ。

「あ、そうだ」

不意にアンナが軽く手を叩く。何かを思い付いたらしい。実に分かりやすい性格だ。

「大樹の根元に精霊ヨークを祀った石碑があるんです」

「それなら知っています。有名な観光スポットらしいですね」

「はい。カルテラの自慢です。私も好きな場所で、あそこに行くと不思議と気持ちが悪く落ち着くんですよ。ネーゼさんにもいいかもしれませんよ。宿からの馬車もありますし」

ヨークの石碑といえば、人の心を安らげることで有名だ。ただの

迷信と考え、リユートはこれまで訪れたことなどなかった。この機会に行ってみるのも悪くはないだろう。

だが、やはりネーゼの体調が気になる。リユートはネーゼの方を見る。そのリユートの気持ちを探したのだろう。ネーゼは頷きながら答える。

「私は行ってみたいです」

「でしょ？　これで決まりですね、リユートさん」

ネーゼの返事にすかさずアンナが反応する。こうなると断っても無駄だろう。

アンナの性格のためだろうが、随分と打ち解けてしまったようだ。

大樹ヨーク

「わあ……」

その声を漏らすネーゼの頭上には、天を覆い尽くすかのように大樹が広がっている。樹齢千年を超えるらしい。もし、千年前に魔王アティラスが実在したというのであれば、この樹はその歴史をも見ていたのだろう。

「皆さん驚くんですよ。さあ、石碑はすぐそこですよ」

そう言うのはアンナだ。

案内役としてリユート達について来たのだ。宿の方は交代制らしく、休憩扱いとなっている。というより、ネーゼの一件で、ずっと働き詰めであったアンナに対する宿側の配慮だったのだろう。

アンナに案内され、リユート達は石碑の目の前まで辿り着く。運

よく、他に観光客はいないようだ。

リユート達は石碑の前に立つ。大樹との対比のためか、石碑は小さく映った。そこに刻まれている文字の意味は分からない。

それにしても不思議な気分だ。空が大樹に隠されているにも関わらず、この場所はまるで太陽の光を浴びたみたいに温かい。これが精霊の力だというのであろうか。

「ネーゼさん、こっちへ」

「？」

アンナがネーゼの手を引く。不思議に思ったリユートは尋ねる。

「どうしたんですか？」

「あ、リユートさんは駄目ですよ。これは女の子だけの儀式です」

「儀式？」

「ふふ、そうです」

詳しいことは秘密らしい。二人は大樹の反対側へと向かう。仕方なく、リユートはもう一度石碑を見る。そのときだった。

「くすくす」

女性の笑い声が聞こえる。リユートは声のする方を見る。

大樹の根元、そこに一人の女性が座っていた。その女性はリユートに向かって小さく手を振る。

「ごめんなさいね。あまりに微笑ましくて。若いっていいわね」

優しい声を出しながら、その女性が近づいてくる。

リユートより年上に見えるが、それでもおそろくまだ二十代だ。ど

こが神秘的で、知的な雰囲気を漂わせている。
女性は優しくリユートに微笑む。

「私はリーネア。旅行が趣味で、世界中を見て回っているの。よろしければ、あなたの名前を聞いてもいいかしら？」

「僕はリユートです」

「そう。綺麗な名前ね。この地方で言うと、かつてアズトーサ王に仕えた詩人と同じ名前よ。詩は好きかしら？」

「いえ、詩はちょっと……」

「それは残念」

リーネアは微笑みを浮かべたまま、石碑の方を見る。

「知っているかしら？ この石碑が祀る精霊の名前はヨーク。精霊の中でも、特に信仰の強い四大精霊の一角よ」

「もちろんです。大樹に宿り、人々に恵みを与える、ですよね？」

「その通りよ。とはいえ、精霊の存在なんて、多くの人は半信半疑これだけ信仰が強いのに不思議なものね。私は信じているんだけどな」

「精霊をですか？」

「おかしいでしょ？ でも、この場所に立つと、いつもそう思うの。だって、心が安らぐもの」

そう言いながら、リーネアは両手を広げる。

そのリーネアに陽光が降り注ぐ。神秘的な光に照らされたその姿は美しかった。伝説の”女神”が存在するというのであれば、こんな感じなのであろうか。

そのとき、リユートはふと思う。このリーネアであれば、魔王について笑わず聞いてくれるのではないか。むしろ手掛かりを知っている、そんな期待すら感じさせる。

「精霊を信じているってことは、もしかして魔王の噂も信じていたりしますか？」

「魔王？ それはまた神秘的ね。そうね……」

リーネアは、大樹から零れた光を手ですくう。

「魔王はこの光と同じ」

「どういうことですか？」

「掴もうとしても掴めず、ただ幻のよう。真実であり、同時に偽りでもある。魔王は、魔王を信じる者の前にだけ現れるものよ」

その言葉の意味はよく分からなかった。

詩的な言葉からは、ただのロマンティストの一人として信じているだけのようにも感じられる。しかし、どうしてだろうか。リーネアの言葉には力を感じた。言葉そのものではない。空気、といえば正しいのだろうか。

考え込むリユートに対し、リーネアはさらに言葉を続ける。

「あなたは信じているのかしら？」

「……はい」

「ふふ、正直ね。でも、笑われるから内緒にした方がいいわよ。そんなことを信じる人なんて魔王信仰者くらいなんだから。もしかしてそうなのかしら？」

「いえ……」

「そう思ったわ。さ、考えるのは終わり」

そう言って、リーネアはその両手を軽く叩く。

「魔王もいいけど、今の彼女を大切にしないで。これは、お姉さん

からのアドバイスよ。ヨークが人々にもたらすもの、恵みの他にもう一つあるのよ?」

「何ですか?」

「恋愛よ。女の子にとっては大切なこと。じゃあね。ヨークの儀式ならそろそろ終わるわ。邪魔者は消えるわね」

リーネアはそのまま大樹から遠ざかるように歩いていった。

自由気まま、まさにその言葉がぴったりと似合う。あんな風に自由に生きられたらどれだけ幸せなのだろうか。いや……それは自分には許されない。そう考えたリユートは小さく頭を振る。

そのとき、ネーゼとアンナが戻ってくる。ぱつと見たところ、何も変わりはない。

「お待たせしました」

「儀式はもういいのですか?」

「はい。ほら、これを見てください」

そう言って、アンナはネーゼの左腕を手取る。よく見ると、何が身に付けられていた。

「これはミサンガ? 切れたときに願いが叶うというやつですよ?」

「はい。でも、このミサンガは少し違うんです。このミサンガ自体に願いはかけませんから」

「じゃあ、どういうミサンガなんですか?」

そう尋ねると、アンナは得意げに説明を始める。

「"儀式"を終えたミサンガには精霊ヨークの力が宿っています。その力で、女の子に少しずつ奇跡を与えてくれるんです。そして、

女の子に本当の幸せが訪れたとき、ミサンガはその役割を終えて切れるんです」

つまりは、この精霊ヨークを絡めたミサンガというわけか。根本は何も変わっていないように思えるが、このカルテラでは大人気のアイテムらしい。それを身に付けたナーゼは、不思議そうにそのミサンガを見ている。

その姿を見て、リユートは思う。

その少女にとっての幸せとは一体何なのだろうか？

幽霊屋敷で出会った少女は鏡を求めた。それと同時に孤独を恐れた。それは、幸せとは程遠い感情。”鏡”を得たところで、それでも幸せには届くとは思えない。

しかし、それはリユートにとっても同じこと。魔王を求める少年の幸せとは、一体何なのだろうか。

悪夢 緋い道

月明かりが照らす草原で、その影はたったひとりだった。

影はゆっくり、ゆっくりと歩いていく。その行く先には、途切れ途切れの緋い道が続いていた。

『きつと……きつとこの先に……』

影は呟く。

それは無意識のうちに。まるで何かにとり憑かれたかのように。おぼつかない足取りで、ただ大地に続く緋い道を一步一步辿っていた。

『必ず……必ず助けるから……』

その道の果てはまだ見えず、緋い道はどこまでも続いていた。しかし、影はその果てがあると信じて進み続けた。

1 カーブ・リトアレイン

大樹の村カルテラ

「リユートさん、ネーゼさん。また来てくださいね」

そう言っつて、アンナはリユートとネーゼに満面の笑みを見せる。そのアンナを前にして、リユートは少し名残惜しさを感じる。少し不思議な気分だった。

リユートの隣に立つネーゼの体調はすっかり回復し、二人はこれからカルテラを出発する。

アンナとの挨拶を済ませ、リユート達は背後で待っている馬車に乗り込む。他に乗客はなく、二人が席に座ったところで馬車はゆっくりと動き始めた。

窓から外を見ると、アンナがまだ手を振っている。二人は手を振り返す。そして、いつしかアンナも見えなくなった。

精霊の棲む森ヴァルサ

馬車の向かう先はビラナという町だ。カルテラから馬車で南へ半日といったところに位置し、二人の目的地であるカミツテとは反対方向となる。

直接カミツテへ向かう選択肢もあったが、カルテラからだ馬車でも数日は必要となる。さすがに女の子を連れた旅で、何の準備もないというのは心もとない。その点、ビラナは商業都市として栄えている。これからの旅の準備を考えても、立ち寄っておいて損はない。もちろん、これらのほとんどはアンナの提案だが。

馬車に揺られながら少し経つ。

リユートはネーゼのことを尋ねていた。既知ではあるが、ネーゼの出身はカミツテである。しかし、どうやら幼い頃に少し住んでいただけらしい。父親の仕事の都合でカミツテの外で長く暮らしていたため、おそらくカミツテへ行っても誰もネーゼを覚えていないだろうという話だ。排他的なカミツテの民からすると珍しい境遇、とリユートは思った。

そのネーゼが”カミツテの鏡”を探している。これはリユートにとって不思議であった。しかし、ネーゼはこの理由について語らない。幽霊屋敷にいた理由に関係しているのだろうか？ もしかすると魔王と……。

そこまで考えたところで、リユートは一人静かに首を振る。ネーゼに疑問があるとはいえ、そこに魔王と関連付ける根拠などない。むしろ強引過ぎる思考だ。

そう自覚したリユートは、気分を落ち着けようと馬車の外を見る。鬱蒼とした木々しか見えない。まだ森の中だ。

！

不意に馬車が大きく揺れる。次の瞬間、馬車はその歩みを止めた。

「どうしたんですか？」

「お、狼です」

「狼……？」

リユートは窓から外を見る。運転手から聞いた通り、そこには多くの狼の姿があった。いずれもヴァルサの森に生息するキッズウル

フだ。しかし、様子がおかしい。

運転手は馬車の中に逃げ込む。それと入れ替わるかのように、リユートは馬車の外へと飛び出す。その手には、鞘から抜かれた剣が握られている。

リユートの脳裏に、一ヶ月前の狼退治の光景が浮かぶ。あの日はたった一匹だったが、今回は五、六匹いる。

「（やるしかない）」

息を呑み、そう覚悟した瞬間だった。狼の一匹がリユートに襲い掛かる。リユートはそれを剣でなぎ払う。なぎ払われた狼は、すぐにその身を反転させる。そして、再びリユートの方を向く。

一筋縄ではいきそうにない。

「リユート……!!」

「駄目だっ!!」

心配だったのか、ネーゼが馬車から顔を出そうとする。しかし、リユートはそれを止める。当然だ。いつ標的になるかも分からない。とはいえ、この状況を乗り切れなければ同じことになる。方策を考える余裕なんてない。今は一匹でも多く倒すしかない。そう直感したリユートは呼吸を整える。

!

それはリユートの背後からだった。不意に狼の一匹が絶叫を上げる。反射的にリユートは背後を振り向く。そこには見覚えのある青年が立っていた。

「やあ、また会ったね」

狼達の警戒を浴びる中、その青年はリユートに笑い掛ける。

「確か、医者を呼んでくれた」

リユートがそこまで言ったところで、青年はその言葉を止めるように手でサインする。

「話は後。ひとまずこの状況を何とかしようよ」

その言葉と同時に青年は剣を構える。リユートは小さく頷いた後、同じく剣を構えた。

ほんの数分程度だろう。青年の協力もあり、無事に狼達を追い払えた。一息ついたリユートは、青年の方を向く。

「助かりました。この間もネーゼの件で助けてもらいましたし、本当にありがとうございます」

「別にいいって。そのネーゼ……って、あの女の子のこと？ 元気になってくれた？」

「おかげさまで」

「よかった。心配だったんだよ」

青年は胸を撫で下ろす仕草を見せる。

「本当は俺も付き添ってあげたかったんだけど、急ぎ旅の途中だったからさ。って、傷薬を買い忘れて、後戻りしている俺がここにいるんだけどね。あ、そういえば、自己紹介していないよね。俺は力

「カープ」

「僕はリユートです。ちょっと待っててください」

リユートは馬車の中を覗く。中にいるのは、ネーゼと運転手だ。運転手はまだ少し警戒している。そして、ネーゼもまた馬車の奥で小さく座り込んでいた。

「ネーゼ、狼はいなくなつた。もう大丈夫だ」

その言葉を聞いた瞬間、運転手は顔を輝かせる。しかし、一方のネーゼはまだ怯えているように見える。あんな状況の後だ。無理もないだろう。そうリユートが考えていたところで、カープが馬車の中を覗き込む。

「初めまして。ネーゼちゃん、でいいんだよね？ 俺はカープっていうんだ。よろしく」

「……ネーゼシアンです。よろしくお願いします」

ネーゼはぎこちなく返事をする。こちらは狼の影響ではなさそうだ。どうもネーゼは人見知りのようである。それを気にすることなく、カープはすぐにリユートへと視線を戻す。

「ねえ。この馬車って、もしかしてカミツテ行きだったりする？

いや、ネーゼちゃんってカミツテの民みたいだしさ」

「そうです。でも、その前にピラナへ立ち寄りますけど」

「そっか」

カープは少し考え込む。

「実は、俺もカミツテに用事があるんだ。歩きながら馬車を捕まえ

ようと思つてたんだけど、ちょうどいいや。俺もこの馬車に乗つてくれない？ これも何かの縁だしさ」

そういえば、カープの目的地のことアンナからも聞いていた。リユートは少し考えるが、特に断る理由はない。

「僕はいいですよ。ネーゼは？」

その質問に対して、ネーゼはおどおどしながら頷く。

「そんなに緊張しなくたって大丈夫だよ。俺って、こう見えてもかなり紳士だからさ。別に襲つたりなんかしないって。ね？」

「……はい」

そんなやりとりに笑いながら、カープは馬車に乗り込んだ。が、すぐに顔を出す。

「そうそう。敬語ってどうも苦手なんだよね。打ち解けられないっていうか。せつかくの楽しい空気が台無しになっちゃうしさ」

そう付け加えた後、カープは馬車の奥へと入っていった。

(カープ・リトアレン)

カミツテへ向かうその青年を加え、馬車は再び先へと進む。

時は進み、いつしか空は薄暗くなっていた。そして、馬車の進む先には、灯の生み出す道が見え始める。その先にあるのは光の集落、商業都市ピラナである。

2 ビラナの酒場

最果ての商業都市ビラナ

「……」

気持ちのよい夜風が吹く。

リユートは振り返る。そこに見えるのは、今日宿泊している宿だ。石造の建物に、いくつもの窓が並んでいる。その一つ、ネーゼの部屋の灯りは消えている。もう眠りにについているのだろう。

リユートは街路に目をやる。もう二十一時を過ぎようかという時刻にも関わらず、まだ道行く人の姿は途絶えない。先日まで滞在していたカルテラとは大違いだ。

商業都市の名前通り、ビラナは商業が発展した華やかな街である。昔は小さな村だったらしいが、首都バリプレートから続く鉄道の完成後に急発展を遂げた。

特に目に付くのは、ローブ姿の学者達である。中には、首都バリプレートが誇る王立研究所から訪れている学者もいる。この地域には多くの精霊伝説が残っており、彼らはそれを目的に訪れているのだ。このような環境のため、必然的に学問も発展し、バリプレートに次ぐ第二の学術都市という顔も持っている。

リユートはゆっくりと歩き出す。

まだ体調の優れないネーゼを一人残すのは心苦しいが、夜間の数時間だけだ。大丈夫だろう。そう思ったリユートに声が掛けられる。

「よっ！」

その突然の声に、リユートは思わずその方を向く。そこに立って

いたのはカープである。

「どこへ行くの？ 夜遊びだったら、俺も付き合っけど？」

小さく息を吐き、リユートはその問いに答える。

「酒場だよ」

「へー、酒場か。だったら、誘ってよ。いい店を知ってるんだ。わりと新しい店なんだけど、オーナーがこだわってね。いい酒を出すんだ。お洒落だし、女性人気も高いし。噂話も豊富だと思うよ」

正直なところ、リユートにとって酒はどうでもいい。だが、噂話が豊富な点には惹かれる。リユートの求める”噂”を得られるかもしれない。

そのとき、リユートはふと思い出す。カープは亡霊騒動の件で活動している。馬車の中ではネーゼに気遣ってその話題に触れなかったが、この機会にその話を聞いておいてもいいだろう。魔王への手掛かりが何か掴めるかもしれない。

そう思いながら、リユートは先導するカープに続いた。

鈴の音が響く　　が、それは同時に聞こえる騒がしい声にかき消された。かなり繁盛しているようだ。

薄暗い店内を照らすのは、所々にある古風なランプ。その配置、明るさの加減は絶妙で、まるで異世界を訪ねたかのように錯覚させられる。

リユートは店内へと進む。開放された小部屋から中の様子が伺える。確かに客層は広い。その一方で、やはり目立つのはローブ姿の学者達だ。中には学生と思われるような客もいる。また、カープの

言う通り、女性客が多い印象だ。夜中まで女性が酒場に立ち寄れる。これは、このビラナの治安のよさを意味しているのだろう。

奥まで進むと、そこは大部屋になっており、いくつものグループ達が盛り上がっていた。その中を進み、二人はカウンターの目の前まで到着する。

「いらっしやい」

カウンターの中にいた小洒落た服装の男性が、お約束の営業スマイルで声を掛けてくる。

「やあ、ジャックさん。また来たよ」

「ははは、カミツテに行ったんじゃなかったのか？ やけに早いね」

「いや、ちよつと縁あつてね。ここにいるリユートと一緒に歩くことにしたんだ。リユート、紹介するよ。ここのオーナーのジャックさん」

リユートは一礼をした後、再びジャックを見る。

見た目は三十代半ばといったところか。店主にしては若い印象を受ける。左の薬指には指輪が見える。どうやら既婚者であるらしい。

リユートの視線に気づいたジャックは、爽やかに笑い掛ける。

「リユート君、でいいのかな？ いらっしやい。私はジャック。以後、うちの店をよろしく頼むよ」

「はい。こちらこそ。あの、カープとは知り合いですか？」

「ははは。客と店主の関係だよ。とはいえ、この店に訪れてくれたんだ。その縁は大切にしないとね」

「ジャックさん、話好きでこの店を開いたんだ。お客様は友達だつて、そんな感じだよ。そんな雰囲気もあつて、女の子のお客さんも多いんだよなあ」

そう言いながら、カープは酒場を見渡す。その視線の先は、店の中の女性達。どう見ても不審人物だ。頼むから巻き込まないでくれよ、とリユートは心の中で呟く。

その様子を見て、笑いながらジャックはリユートに話し掛ける。

「それで、リユート君。何か飲みたいものはあるかい？」

「りんご酒はありますか？」

「もちろん。材料は豊富だからね。カープはどうする？」

「そうだなあ。あ、ビール頼みます。この間のレモンテイストなやつ」

「はい。かしこまりました」

ジャックは手際よく、注文の飲み物を用意する。そして、洒落たグラスにそれを注ぎ、二人に差し出した。リユートはそれを受け取り、一気に飲み干す。

りんごの風味が口中に広がる。心地よい甘さ。すっきりとした後味。そして、適度なアルコール加減。思わず、リユートの口から言葉が漏れる。

「おいしい……」

「だろ？ ジャックさんは、ビルナードの外で開かれている世界コングテストで入賞してるんだ。言ってみれば、世界認定の味さ」

カープはビールを飲み干す。その表情、仕草には何か達成感のよくなものを感じる。大げさすぎる気もするが、やはりそちらの味も極上なのだろう。

「もう一杯いくかい？」

「お願いします」

笑い掛けるジャックに、リユートはグラスを差し出す。
そのときだった。リユートは隣に強い存在感を感じる。咄嗟にその主を確認しようとする。しかし、それより先に大きな音が響く。その音源には、明らかに特注の巨大な木製カップが置かれている。そして、それを置いた主は、大きく、力強い声を発した。

「ジャック。こっちもだ。ぶどう酒を追加で頼む」
「分かったよ。ちょっと待っていてくれ、ハイン。それにしても、これで何杯目だ？ 今日随分と景気がいいじゃないか」

ジャックは手早くリユートのグラスを手取る。そして、りんご酒を注いでカウンターに置いた。その間にも、ハインと呼ばれた大男はジャックとの会話を続ける。

「まあな。でかい仕事が終わったとこだしな。どうせ帰ったら子守りで飲めねえんだ。今がチャンスってわけよ」

「ははは、アミスちゃんのことかい？ そんなこと言っていると、今度言いつけてやるぞ？」

「おいおい、そいつは勘弁してくれよ」

ハインが大声で笑っている間に、ジャックはぶどう酒をカップに注ぎ始める。巨大なカップだけあって時間がかかる……これを何杯も？ と、ついつい視線を奪われるリユート。その様子にハインが気づく。

「よお、そんなにあのカップが気になるか？ ははは、俺との飲み比べに勝てたら譲ってやるよ。どうだ？」

「い、いえ……」

リユートは慌てて首を振る。

……無理だ。絶対に勝てる気がしない。リユートの心の声が聞こえたのか、ハインはさらに大声で笑った。

「ハイン。大切なお客さんなんだ。あんまりからかわないでくれよ」
「ああ、悪かった」

笑いながら、ハインはぶどう酒の注ぎ終わったカップを手取る。そして、すぐにその場を離れていった。安堵なのか、リユートは溜息を漏らす。

「すごいのがいたな」

同じく気になったのだろう。カープはまだハインの方を見ている。

「ああ、ハインか。たまに来るんだ。実際にすごい奴だよ。」ギルドのハイン” って知らないかな？ その筋じゃ有名な奴だよ。数ある賞金ギルドの中でも最強ってね」

「あ、名前は聞いたことある。そっか、確かに強そうだなあ」

「でも、根は優しい奴なんだ。元は騎士らしいしね」

「それは嘘でしょ？」

その視線はまだハインを捕えている。一際目立つその存在は、少なからず二人の心に焼き付いた。

3 魔王を信じる男

ビラナの夜は更けていく。

町の明かりは、一つ、また一つと消えていく。先ほどまで灯っていた研究所の明かりの数も気づけば少なくなっている。もっとも、このいくつかは朝まで灯っているのだが。

その一方で、闇夜に似つかわしい大きな汽笛が聞こえる。バリブレート行き最終列車は、これから三、四時間をかけて首都へと乗客、荷物を運んでいく。

そのいつもと変わらないビラナの夜は、ジャックの酒場にも訪れていた。

酒場は盛り上がっている。カープの周りには、いつの間にかその飲み仲間達も集まっていた。

「ははは、カープ。お前もいい加減にしとけよ」

「本当だ。王国様の依頼で寄り道なんて罰が当たるぞ？」

「人聞き悪いなあ」

楽しそうに笑いながら、カープはグラスに残っていたビールを飲み干す。そこへリユートが戻ってくる。

「あれ、用事は終わったの？」

リユートは黙って頷き、そしてカウンターに座る。飲み仲間達に手を振りながら、カープはリユートの隣に座る。

「なんか暗いなあ。お目当ての”情報”は手に入らなかったの？」

「聞いてたのか？」

「いや、そりゃ同じ部屋の中だしね。何か情報を集めていたくらいは分かるよ。もしかしてネーゼちゃんにも関係するの？俺でも協力できそうだったりする？」

リユートは少し考え込む。魔王についてであれば、先ほど世間話の中で少し触れた。カープも魔王の情報については持っていない。これ以上の話は無駄であろう。

せっかくなので、リユートはネーゼに関する情報を尋ねようとする。

「もしかして”鏡”に関係するのかな？」

不意に聞こえたその質問が、リユートから言葉を奪う。そのリユートを見て、質問の主であるカープはさらに続ける。

「いや、まさか本当だとはね。偶然って怖いねえ」

カープは頭を掻きながら笑う。それ見て、ようやくリユートは言葉を取り戻す。

「どうして”鏡”を探しているって思ったんだ？」

「いや、ただの勘だよ。ほら、ネーゼちゃんってカミツテの民でしょ？それに、ちょうど俺が今関わっている仕事と重なってたし」

リユートはカルテラでアンナから聞いた話を思い出す。カープはバリプレートからの依頼でカミツテへ行く途中である。その理由は”亡霊騒動”だ。

リユートはそれらのキーワードと”鏡”との関係を考えてみる。そのとき、リユートは”ある鏡”のことを思い出した。そして、その記憶と重なるかのようにカープが言葉を続ける。

「そういえば話してなかったよね。千年遺跡の鏡。それが原因の亡霊騒ぎを解決するってのが俺の仕事なんだ。で、カミツテへ行くのもその都合なんだ」

千年遺跡の鏡。

かつて魔王アティラスが所有したとされることで有名だ。千年遺跡は首都バリプレートの名所でもあり、その鏡についてリユートも話には聞いたことがある。ただの観光地、とそれほど重要視はしていなかったが。

さらに、その鏡とネーゼの関係を考えようとする。そのリユートの目の前に小皿が差し出された。その上には、この地方特産の鳥の燻製が乗っている。

「それは私の奢りだよ」

そう言いながら、ジャックが笑いかけてくる。

「何の話をしてたんだい？」

「ジャックさん。いやね、亡霊騒ぎの話をしていたところなんだ。

あ、この鳥ありがとう」

カープは燻製の一つを手でつまむ。

「へえ。そういえば、あの事件も大変なことになってきたらしいね」「えー!？」

バリプレートから依頼を受けていたはずのカープが驚きの声を上げる。口に入れていた燻製を一瞬喉に詰まらせかけるほどだ。それを見てジャックは笑う。

「その様子だと、何も知らないようだね」

「どんなことになっているの？」

「あの天才騎士エレヴァ・クレシアが動くらしい」

「ええええええっ！？ エレヴァさんが！？」

カープは身を乗り出す。今にも立ち上がりそうな勢いだ。

ジャックから出たその名前。エレヴァ・クレシアといえば、この地方であれば誰もが知る名だ。

もつとも有名になったのは、ここ二、三年となる。まだ二十歳前後の女騎士が、歴代最年少で副団長に抜擢されたことで、ビルナー中が大騒ぎになった。武力・知性・人望・統率。どれをとっても卓越しており、今では騎士団の顔となっている。

「その噂を聞いたのは昨日だし、何か緊急事態でもあったのかもね。ここ一ヶ月は魔物の噂も多いし、少し怖いくらいだよ」

「そうですね。俺も仕事を急がないと」

そう言っつて、カープは手元のグラスの中身を飲み干す。そして、何やら強く気合を入れる。

一方のリユートも、エレヴァ・クレシアほどの有名人が動く事件については気になる。さらに、アンナから聞いていた話では、カープは女神様の力を借りようとしていたはずだ。

「その亡霊事件だけど、カープはどうしてカミツテへ行くんだ？」
「女神様の泉へ行きたいんだ。鏡の暴走を抑えるのに、その泉の水の力を借りるってわけ」

カープの話によると、鏡の暴走はこれまでも数回発生しているらしい。もちろん今回と比べると小規模であり、そのため一般にはあ

まり知られていない。そして、そのときに解決策として考えられたのが女神様の泉の水となる。

魔王の鏡だから女神様の力で。そんな気休め程度の案ではあったものの、大方の予想に反して効果が出てしまった。このため、それが現在まで続いているとのことだ。

そこまで聞いたところで、リユートの頭に”ある単語”が流れる。そのときだった。

「よお」

不意にリユートの思考を遮る声が聞こえる。リユートはその声の主を見る。そこにいたのは見知らぬ男であった。少なくともリユートはその男のことを思い出せない。見れば、その男はかなり酔っ払っている。人違いということも考えられる。

「失礼ですが、どちら」

「まだ探してんのか？ 魔王」

その言葉でリユートは理解する。まだ顔は思い出せないが、以前に魔王の情報を尋ねた人物の一人だ。

リユートは言葉を出せず、ただ黙っている。それを見て、その男は調子付く。リユートの肩を叩きながら、さらに言葉を続けた。

「はは、魔王復活だあ？ あんなのただの噂だ」

！

そのとき、男の背後で、まるで大地が揺れんばかりの大きな音が

聞こえた。

その音に驚き、その男だけではなく、酒場中が静まり返った。小部屋からこちらを覗く者もいる。会話を続ける者など誰一人いない。その静寂の中、そこにいる全員の注目を集めて、その中心にいる男は一言だけ重く、そして強く言い放った。

「俺は……信じる！」

その男は立ち上がり、すぐ横の壁に立て掛けていた巨大な大剣を手取る。そして、ゆっくりとカウンターに歩き始めた。

まだ誰も言葉を発せない。

その風貌。その空気。そして、ギルド最強の名。

それらを併せ持つ”ギルドのハイン”という男の動向に、等しく全員が釘付けとなった。

「ジャック、悪いな。白けさせちゃった」

小さく響く金の音が終わった後、ハインはカウンターに背を向ける。

「釣りはいい。もし足りなかったらツケといてくれ」

そう言い残し、ハインはゆっくりと出口へと向かっていった。その姿が消えてからも、しばらく酒場は静寂のままだった。

「今のは……？」

その眩くかのようなリユートの問いに、ジャックが答える。

「ああ、ハインなら気にしないでくれ。あいつの悪い癖だよ」

「……」

何を思い立ったか、リユートは無言のまま代金をカウンターに置く。そして、そのままハインを追った。呼び止めるジャックとカープの声もリユートには届かない。

ただ夢中だった。

「待ってくださいっ！」

「ああ？」

呼び止める声にハインは振り返る。

「何か用か？」

「もしかして魔王を探しているんですか？」

再び空気が張り詰める。心臓の鼓動が聞こえる。

「だったら何だ？」

「……僕も、探しています」

その言葉は再び静寂を呼ぶ。

この日、この時、この瞬間。魔王、その幻を追う二人は互いの存在を認識することになる。

4 女神の大地

この地方を代表するヤス山脈。その荘厳な風景は、全ての客人を魅了する。麓を流れる川のせせらぎは心地良く、また空を翔る鳥はまるで天の使いのようである。さらに、バリプレート地方とこの地を二分するその様は、まさに大地の番人と呼ぶのにふさわしい。そして、その麓に一つの集落が映る。それがカミツテだ。

目的地がバリプレートと分かったリユートとネーゼにとって、この土地はただの寄り道でしなくなっていた。しかし、カープの話によれば、千年遺跡は現在封鎖中であり、一般人の立ち入りは禁じられている。亡霊騒動ということを考えれば、当然の状況だろう。これに対し、カープの協力者ということであれば話は別になる。カープの方からバリプレート側に話を通してくれるらしい。もちろん確実というわけではないが、それでも可能性があるに越したことはない。

それに、カミツテへ行くことは、リユートにとってメリットがある。追いかけている”情報”について何か得られるかもしれないからだ。

一方のネーゼも、特に異論を挟むことはなかった。

『鏡の場所へ行けるのなら』

その一言だけを発し、ネーゼはカミツテ行きを受け入れた。

そのネーゼは静かに馬車の外を見つめている。何かを考えているようにも見える。おそらく久しぶりに訪れる故郷を懐かしんでいるのだろう。そう考える一方で、リユートにはもう一つ気になっていることがあった。ギルドのハイン。リユートと同じく魔王を追う存

在。

そのようなことを頭に浮かべている間にも、馬車はゆっくりとカミツテへ近づいていく。

女神の大地カミツテ

村に入った途端、リユートは少し驚かされることになる。

そこに映るのは金色の瞳をした村人達だ。それはネーゼと全く同じであった。以前にも訪れたことはあるものの、慣れないリユートには不思議な光景であった。一説によれば、この瞳の原因は、カミツテの風習となつてゐる女神の泉の水による産湯であるらしい。あくまで一説であり、その真偽を知る者などいないのだが。

その一方で、ネーゼは静かに村の中を見回していた。テント風の家。そよ風に揺れる干されたキルト。そして、民族衣装を着て歩く住民達。しばらく見回した後、今度は川辺で遊んでいる子供達をじつと見つめた。

そのリユート達に村人の一人が気づき、こちらに近づいてくる。それを見たカープも村人の方へ歩いていく。

「こんにちは」

「ああ、こんにちは。よく来たな、カープ殿。今日は連れもいるよ
うだが、また女神様の泉の件か？」

「はい」

その返事に、村人は一瞬その言葉を止める。

「前回からそれほど時間が経っていないな。悪い前触れでなければ
いいが」

「そうですね。さすがに今回はまずいみたいですね」

そうか、という仕草を村人は見せる。それは、カミツテが排他的であることを忘れられるくらい自然なやりとりだった。

「長老様は本日外出されていないはずだから、そのまま訪問するといい。ところで」

先ほどから気になっていたのだろう。村人はネーゼを見る。

「彼女は？ 見ない顔だが、外住者か？」

「そうらしいですよ。その鏡の件で一緒に行動しているんです」「鏡の件で？」

村人は再びネーゼの方を見る。そして、少し考え込むような仕草を見せる。

リユートはしばらくそのやりとりを見ていた。しかし、ネーゼの話題が出たところで、ネーゼの方に視線を向ける。ネーゼはまだ川辺の方を見つめている。

「ネーゼ、やっぱり懐かしいのか？」

「え？」

突然の質問に、ネーゼは少し驚きを見せる。

「……はい。この空気は昔と同じで、とても懐かしいです。それでもいろいろと変わってしまいました」

ネーゼの声は少し寂しげであった。リユートは村を見渡してみる。それほど変化しそうでない村だが、故郷の者であればそう思うもの

なのか。そう考えているところへカープが戻ってくる。
そのカープに先導され、リユート達は長老の家へと向かった。

「話は分かりました」

目の前に座る老人はそう返事した。

フィスク・ラ・ヴァンダ。このカミツテを治めている人物だ。その両側にそれぞれ座る二人の付き人と比べるとよく分かる。老齢ながらも、一際威厳を感じさせる瞳。さすがはこのカミツテの長といったところだ。

その老人ヴァンダは言葉を続ける。

「女神様の泉へ行く許可を与えましょう。ですが、今日はもう遅い。しばらくすれば日も暮れるでしょう。出発は明日の朝ということでよろしいですか？」

「はい」

「それでは、本日はここで休んでください。すぐに部屋を用意いたします」

そう言った後、ヴァンダは立ち上がる。それに付き人の一人も続く。そして、ヴァンダを奥へと連れていった。残った一人の付き人は、こちらに向かって深々と礼をし、そして口を開く。

「しばらくこちらでお待ち下さい。部屋の準備が整いましたらお呼びいたします。また、夕食もご用意いたしますが、もし事前に何か食されたいとのことでしたら、そちらにある果実をご自由に召し上がってください。それでは、私もここで。何かありましたら、そちらのベルでお呼び下さい」

立ち上がった付き人は、再び深々と礼をして奥へと入っていった。その足音が遠くなっていく。

「いやあ、堅苦しかった。毎回のことながら、疲れるんだよね」

そう言いながら、気の抜けた表情でカープは寝転がる。しかし、その視界にネーゼが映ると慌てて態度を変える。

「い、いや……別に悪い意味じゃないんだよ。ただ……ちよつと俺には合わないなって。な、リユートもそうだろ？」

とんだ飛び火だ。だが、カープは”話を合わせてくれ”という視線を必死にリユートへと送る。それに負けたリユートは小さく息を吐く。

「まあ、僕もそんなに得意な方じゃないな」
「だろ？」

それを聞いて、カープは安心感を見せる。そして、すぐにネーゼの様子を伺う。

「……」

無言のままだ。

……まずい、怒らせたかな？ そのような様子でカープは狼狽える。一方のリユートは、まさかといった様子でネーゼを見る。ネーゼは先ほどから動かない。

！

刹那の瞬間。

部屋の空気が張り詰める。それはあまりに唐突で、リユートも力
ープも動けなかった。思考が追い付く。それと同時に、視線の先に
は倒れているネーゼが映る。

「ネ、ネーゼ……？」

リユートは何とか声を出す。しかし、その声に対して返事はない。
また無理をしていたのか。そう思考が働いた瞬間、リユートは近
くにあったベルを力強く鳴らした。

そこは見慣れない暗い部屋。
わずかに照らされる灯りは、そこに立つ二人の存在を映し出す。

『嫌です……』

少女は呟いた。
それはわがままであった。ずっと我慢してきたわがまま。
しかし、目の前の男は、聞こえたはずの言葉をただ流す。

『目が覚めたときには全て終わっている』
『嫌ですっ！』

少女は男にしがみつく。

『分かってくれ。これしかないのだ』

男は少女を抱きしめる。その手は震えていた。
そして、少女の髪を撫でる。

『目覚めたときには全てが終わっている。そこで幸せに生きてくれ、
ネーゼ』

その言葉の後、少女の意識は途切れた。

5 女神の洗礼者は現れた

泉への道

「それにしてもネーゼちゃん達はもったいないよね。女神様の泉を見られるせつかくの機会なのに」

「見世物ではない」

カープの言葉に、話し掛けられた青年はそう返す。

名前はレウス・ラ・ハウク。年齢はカープよりやや下なのだが、その風格は遥かに年上を感じさせる。しきたりを重んじるカミツテならではといった青年だ。着こなす民族衣装は、さらにその威厳を強めている。

カープは何度か女神の泉を訪れているが、毎回このハウクが案内人として同行している。とはいえ、女神の泉への道のりは単純である。カミツテへと流れる川に沿った小道をそのまま進むだけでよい。どちらかというと、部外者が不審な行動をとらないための監視人という方が正しいだろう。

「分かってるって。それにしても、毎度毎度お前も大変だよな」

「不満はない。」鏡”が関わっている。これはカミツテの責務だ」
「相変わらずお堅いことで」

話をしているうちに、鬱蒼とした木々のある山へと入る。しばらくしてその視界が開き、大きな泉が姿を現した。

女神の泉

「何度来ても、何ていうか心が安らぐよなあ」

カープは泉を覗いてみる。岸边ではあるものの、泉の底は見えない。まるで世界の果てまで続いているかのようにであった。

「ここは神聖な場所だ。用事を済ませたら、すぐに帰るぞ」
「はいはい」

力の抜けた声で返事しながら、カープは上着のポケットから小瓶を取り出す。カープが小瓶に水を汲んだことを確認すると、ハウクはすぐに口を開く。

「さて、用事は終わりだな。帰るぞ」

「いつもながら……。はあ、もう少しこの光景を楽しみたいね」

そのカープの呟きを無視して、ハウクは帰路につこうとする。のんびりする暇など与えるつもりはないようだ。

やれやれという仕草をして、カープはハウクに続こうとする。そのとき、先を進むハウクの足が止まる。別にカープを待っているわけではない。

立ち止まったハウクは注意深く辺りを見渡す。一方のカープも何かに気づき、その手で腰の剣を拵んだ。

「何かいる……よな」
「間違いなく」

不意に大きな鳴き声上がる。そして、近くの茂みから二匹の猿が奇声と共に飛び出してきた。かなり気が立っている。

「これは……？」

「勘弁してくれって。こんな凶暴な奴がいるなんて聞いてないし」
「つべこべ言うな。追い払うぞ」
「余計な労働だよ」

カープの愚痴を無視して、ハウクは手に持っていた杖を構える。そして、飛び掛って来た猿にその杖を叩きつける。狩猟を生業としているためか手馴れている。

「さっすが」

そう言いながら、カープも猿を剣で斬りつける。それでも猿達は怖気つく様子を見せない。

「けっこう厄介だなあ」

「これもまた鏡の影響か。ここまで動物達に影響を与えるとは」
ハウクは再び襲い掛かる猿を杖で叩きつけると、泉の方へ駆け出した。それを見たカープは、急いで先ほどの小瓶をポケットから取り出す。

「そうだった。忘れてた」

カープは小瓶の栓を開け、中の水を猿の一匹に向けて振り掛ける。水に濡れた猿はすぐに大人しくなった。そして、傷の影響なのか、そのままその場へと倒れた。

「そりゃ、あの鏡の影響ならこうすればいいんだよな」
「そういうことだ」

そう言うと、ハウクは泉に手を沈める。そして、襲い掛かってき

た猿に水を掛けた。先ほどと同様、その猿も大人しくなった。

「これで落ち着いたかな？」

「おそらくはな」

ハウクはカープに近づく。そして、カープの傍で倒れている猿に向けて手をかざした。

突然ハウクの手が輝く。あらゆる傷、病を癒すとされる”カミツテの奇跡”だ。猿の傷はみるみる回復する。そして、傷の完治した猿はそのままどこかへと去っていった。

「さすがにお優しいことで」

「カミツテは自然と一体。それにあの猿に罪はないのだ」

「それにしても困ったもんだなあ。ここに来る途中でも狼の群れがあんな感じでさ。特に、ここ一ヶ月はおかしいよ」

カープは再び女神の泉から水を汲む。それを見ながら、ハウクは静かに話す。

「三年前、女神様の泉は輝きを見せた。やはり何かが起きているのかもしれないな」

女神の大地カミツテ

「まだお休みのようです。今はゆっくりとするのが一番でしょう」
「そうですか」

リユートの返事を聞いた後、カミツテの女性は再びネーゼの眠っている部屋へと入っていった。

昨日に倒れてから、まだネーゼは目を覚ましていない。聞くところによれば、随分とうなされているらしい。

「……」

部屋の戸は閉じられている。その戸を少し見つめた後、リユートはその場を離れようと振り返る。そのとき、そこに長老ヴァンダが立っていることに気づいた。

「随分と心配されているようですね」

「はい」

「ネーゼシアン殿と言いましたかな？ 何かの病気というわけではありませんよ。ただ少しお疲れのようですね。もうしばらく休ませた方がよろしいでしょう」

そう言って、ヴァンダは奥の広間へと進む。もう一度ネーゼの部屋の方を見た後、リユートも広間へと足を進めた。広間の奥にはヴァンダが座っていた。

「さあ、遠慮せずに座りなされ。もうしばらくすれば、カープ殿も戻ってくるでしょう」

促されるままにリユートは座る。昨日と同様、その自然なやりとりは、以前に門前払いを受けた村ということのを忘れさせる。リユートの口が自然に開く。

「あの、一つ尋ねてもいいでしょうか」

「何ですか？」

「ネーゼは”鏡”を探していました」

「”鏡”を、ですか？」

「はい。その鏡はカミツテのもので、さらにその鏡で亡霊騒ぎが起きています」

ヴァンダは静かにリユートの瞳を見つめている。

「ネーゼはカミツテの人間。そのネーゼが鏡を探している。これには何か意味があるのでしょうか？」

その問いに、ヴァンダは一呼吸置いて答える。

「それは私にも分かりませんな。ネーゼシアン殿の個人的な理由によるものでしょう。あれの管理はバリプレートに任せているのですから」

それを聞いて、リユートは肩を小さく落とす。強く期待していた回答があるわけではない。だが、何故かその回答に期待外れといった感覚を受けた。

そのリユートを見て、ヴァンダが問い掛ける。

「それだけですかな？」

まるでリユートの心を見透かしたかのような質問。いや、肩を落とすリユートを見れば、誰だってそう思うのかもしれない。

リユートは再びヴァンダの方を見る。

「もう一つだけ聞きたいことがあります。この鏡の事件、その……
”魔王”が関わっていたりするでしょうか？」

一瞬の静寂。

その間、ヴァンダはリユートの瞳を見つめ続けていた。強い金色

の瞳。だが、リユートは気圧されることなく見つめ返す。

「ただの好奇心とは違つようですな。事情までは問わないでおきましよう。それで質問でしたな？ はっきりとは申し上げられませんが、その可能性はあるでしょうか？」

リユートは思わず目を見開く。自身の手が震えるのを感じる。

「何かご存知なのですか？」

「いいえ。可能性がある、ただそれだけのことです。女神様の伝説はご存知ですな？」

「はい」

「その中に登場する女神様の戦士。”洗礼者”とも呼ばれますが、その者が現れた兆候がありました。ちょうど三年前でしたかな。女神様の泉が不思議な輝きを見せました。まさに文献にある通りに」と、いうことは「

ヴァンダは頷くことなく、リユートの瞳を見る。そのとき、広間の外から誰かの声が聞こえる。続いてカープの声も聞こえる。

「話はここまでですな」

そう言うと、長老は”ハウク”という名前を呼んだ。少しして、ハウクとカープが広間に入ってくる。

「ただいま戻りました」

「はあ、全く疲れましたよ。お、リユート。ネーゼちゃんはどうか？」

リユートは静かに首を振る。それを見たカープは、がっくりと頭

を下げる。

そのやりとりの間に、ハウクはヴァンダの前に座り込む。そして、泉で遭遇した猿の件を報告した。ヴァンダは黙ってその報告を聞き、少し考え込む。

「カミツテとしても、そろそろ動いた方がよいかもしれんな」

そのヴァンダの言葉に、ハウクは黙ったまま頷く。それを確認した後、ヴァンダはカープの方を向く。

「カープ殿、お願いがあります」

「はい。何ですか？」

「このハウクを鏡の場所まで同行させてください」

「ええ？」

「あの鏡はもともとカミツテのもの。カミツテの民として、その状態をハウクに確認させたいのです」

「うん。まあ、俺は別にいいんですけど。リユート、判断は任せるよ」

リユートもハウクの同行に同意する。先ほどのヴァンダの話もあり、リユートの中で”目的”への期待が膨らんでいた。そのリユートへハウクが声を掛ける。

「そちらの客人に挨拶はまだだったな。レウス・ラ・ハウクだ。短い間となるが、よろしく頼む」

「僕はリユートです。こちらこそよろしく申し上げます」

(レウス・ラ・ハウク)

若くして、カミツテで最高とされる癒術の使い手である。そのハ

ウクは長老ヴァンダの信頼を受け、リユート達とバリプレートを目指すこととなった。

その夕刻にはネーゼが目覚めます。まだ不安は残るものの、目立った問題はなさそうだ。その翌日、リユート達は”鏡”の待つバリプレートへと出発した。

悪夢 二 この世の地獄

「うわあっ!」

村のあちこちから悲鳴が聞こえる。

若い少年は、ただ目の前の光景を見つめるだけであった。

突然村を襲った獣の群れに、多くの人々が殺された。

いつも遊んでいた友達。いつも買物した店のおじさん。そして、少年の両親。

当たり前のように生きていた人達が、当たり前のように死んでいく。

涙はなかった。

いや、その理解を拒否していただけなのかもしれない。

少年は、瞳を大きく見開いたままその光景を見つめ続けた。

それはまるで地獄のようであった。

1 ギルド”置き去りの時計”

「まいったな」

そう呟いたのはカープである。

四人は現在ヤツカテルという町に滞在している。ピラナから列車で二時間といったところにある町だ。

ここに留まっているのには理由がある。ヤツカテルと次の駅町であるハルデイとの間には、ヤス山脈が広がっている。このヤス山脈を通り抜けるトンネルが、土砂により埋もれてしまったのである。これにより、列車の出発は見送られることとなった。

山門の町ヤツカテル

四人は宿内の騒がしい食堂で、少し早めの昼食をとっていた。

「このタイミングで土砂ってきついなあ。一昨日だったらよかったらしいのに。ついてないよ。日頃の行い、悪くないと思うんだけどなあ」

そう言うのは、首都バリプレートからの依頼後、散々”寄り道”をしてきたカープである。その事情を知らないハウクは冷静に返す。

「だが、亡霊騒動という事態を考えれば、のんびりと待つわけにもいかないだろう。急いでバリプレートへ向かうべきだ」

「とは言ってもなあ。復旧まで数日レベルじゃないらしいし」

「復旧まで時間が掛かるのであれば、ヤス山脈を越えればいい」

「ヤス山脈だったって……」

カープはちらりとネーゼの方を見る。

「私は大丈夫です」

カープの心を読んだかのように、ネーゼは返事をする。だが、ここ数日で二回も倒れている。それを知るリユートは、ネーゼの返事をそのままに受け入れられない。

「ネーゼ、無理はしない方がいい。ヤス山脈を越えるのは二、三日掛かりになる」

「本当に大丈夫です」

ネーゼはきつぱりと返事する。よほど鏡の場所へ急ぎたいのだから。

「決まりだな。今日中に準備を整えて、明日にはヤス山脈へ向かう」

そのハウクの言葉に対して、カープは力の抜けた声を出しながら机に頭を当てる。よほど登山が嫌だったのだろう。

しかし、山越えといっても、実際それほど険しい道のではない。交通期間が発展する前は、バリプレート方面へ行くにはヤス山脈を超えるしか手段がなかった。そのため、登山道はしっかりしており、また途中には休憩地点がいくつもある。最近でも旅行者の登山名所となっており、道は整備されたままである。

ネーゼを気遣いながら進んだとしても、一日もあれば中継地点にあるシルクという村に到着できるだろう。それに、いざとなればハウクの”カミツテの奇跡”もある。

それらの安心材料により、リユートも山越えに同意した。

食事の後、リユートは一人でヤツカテルの町を歩いていた。

ヤス山脈へ向かうのは翌朝となる。山越えの準備は宿に依頼しており、出発まで時間が空いていた。

カープは少し寄りたい場所があるらしく、一人でどこかに出掛けていった。また、ハウクは容態の分からないネーゼと一緒に宿へ残った。そして、残るリユートは、カープと同じく自身の用事のために出掛けていた。

その目の前には一軒の建物がある。リユートはポケットから一枚の紙を取り出す。そこには、この建物の場所を示す地図、そして”ある言葉”が書かれていた。

ギルド『置き去りの時計』

この地方には何種類ものギルドがある。商売人達が情報を交換する商人ギルド。専門の技術者達が仲間と切磋琢磨する職人ギルド。数あるそれらのギルドと比べると、同じギルドの名をしても目の前のそれはやや異質であった。

賞金ギルド。その名が示す通り、賞金稼ぎのためのギルドだ。魔物退治から迷子の搜索までと、その依頼の幅は広い。その意味では一般人にも馴染み深いギルドである。

その一方で、依頼の幅は”表”の世界だけではなく、”裏”の世界にまで広がっていることが多い。殺しの依頼もあり、その筋で有名なギルドも存在する。このため、一部の賞金ギルドは世間から嫌煙されている。

幸いなことに、リユートの目の前にあるギルドに対して、そういった類の噂は聞かない。とはいえ、かの有名な”ギルドのハイン”を擁するギルドに、そのような依頼がないとも思えないが。

『……僕も、探しています』

ピラナでの夜、リユートとハインはそれ以上の言葉を交わさなかった。その代わり、ハインは一枚の紙をリユートに渡した。先ほどリユートが見ていた紙である。目的を同じくする仲間同士、情報交換をしようといったところだろう。

もっとも、現在ヤツカテルにいるのはただの偶然であり、さらにハインがこの場所にいつ現れるのかもリユートは知らない。

リユートは小さく深呼吸をし、そして建物のドアを開いた。

内部はリユートが思ったよりも明るかった。白を基調とした壁紙に、光の差す大きな窓。何も知らなければ、少しお洒落なカフェテリアと勘違いしてしまいそうだ。一般人の訪れもあることを考えれば、こんなものなのかもしれない。

そして、さらに意外なことに、カウンターの奥から出てきたのは十四、五歳くらいの女の子だった。その女の子は、屈託ない笑顔で明るく声を出す。

「いらつしゃいませ。何かご依頼ですか？」

「ちよつと会いたい人がいて。ハインっていますか？」

「ハイン？」

女の子は目を丸くする。

「ごめんなさい。ハインだったら、バリプレートに出掛けてましていつ戻るかも分からないんです」

「そうか。いないのか」

「何か伝言がありますか？」

「いえ。いるかなと思っただけですし、出直します」

リユートが立ち去ろうとしたそのときだった。

「待ちなさい」

リユートはその呼び止める声の方を見る。いくつかあるテーブル席の多くは空いており、声の主である女性はすぐに特定できた。

「ハインを指名なんて随分と物騒ね。魔物退治か何かかしら？」

その女性は立ち上がり、リユートの方を向く。鋭い眼光。それとは裏腹に幼さを残す顔立ち。飾り気のない紐で結われた左右の髪も特徴的だ。腰にあるレイピアを見る限り、このギルドの賞金稼ぎなのだろう。

「ははは。そんなこと言うなって。あれでもいい奴なんだぞ」

奥からもう一人立ち上がる。年齢は三十くらいか。おそらくハインと同年代の男だ。都会の紳士といった整った服装をしており、また色眼鏡といった点でもファッションへのこだわりを感じさせる。その右手に持つグラスには、昏過ぎだというのにアルコールが注がれている。

その男が近づいたところで、先ほどの女性が鋭い瞳で睨みつける。

「ミッド・デッド。それ以上は近づかないで。私、アルコールの臭いは嫌いな」

「ええ！？ イーファちゃん、そりゃないよ」

そう叫ぶミッドを無視して、イーファはリユートの方へと歩く。イーファの視線が一瞬リユートの剣に移る。

「見たところ、あなたは魔物退治の依頼者ではないわね。でも、ハインの友人って感じでもなさそう。まあいいわ。忠告だけはしてあげる。ハインにはあまり関わらない方がいいわよ」

それだけ言つて、イーファは建物から出ていった。何も答える時間を与えられなかったリユートは、ただ去りゆくイーファを見つめるだけであった。

その頃、カープは一人で町を歩いていた。

「……はあ。ヤス山脈ねえ。シルクにはあいつがいるんだよなあ」

そう呟いた後、ヤス山脈をちらりと見る。澄み渡った青空を背景に、その山脈には確かな存在感がある。さすがは精霊ナロクの聖域と呼ばれているだけのことはある。しかし、それほどの場所を前に、カープの心は憂鬱で満たされていた。

もう一度溜息をついたとき、カープはその背後に誰かの気配を感じる。カープは、その人物の訪れを知っていたかのように振り返る。

「よ、デイミス。久しぶりだな」

その視線の先は、まるで鏡のようであった。服装は違えど、カープと同じ顔をした青年が立っている。だが、その青年はどこか落ち着いた雰囲気を感じさせる。

「ええ、久しぶりですね。こんなところで会えるとは思いませんで

したよ、兄さん」

そのデイミスと呼ばれた青年は、静かにそう返事した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0583z/>

ツキを見て泣いたヒト

2011年12月24日10時48分発行